

平成 30 年度障害者総合福祉推進事業
当事者・家族等による、精神障害者に対する理解促進等
に資する普及啓発方法の開発
事業報告書

平成 31 年 3 月
PwC コンサルティング合同会社

目次

1 本事業の概要.....	1
(1) 背景と目的.....	1
(2) 事業内容.....	2
2 ドキュメンタリー映像制作委員会の開催・運営.....	3
(1) 目的.....	3
(2) 委員構成.....	3
(3) 開催スケジュールと議題.....	4
3 既存啓発コンテンツ調査.....	5
(1) 目的・調査対象.....	5
(2) 調査結果.....	5
4 映像制作.....	9
(1) 全体像.....	9
(2) ダイジェスト編.....	10
(3) 本編.....	11
(4) 導入編.....	30
5 映像に対する評価.....	32
(1) 実施概要.....	32
(2) 評価結果.....	33
6 まとめ.....	42
(1) 映像コンテンツについて.....	42
(2) 映像の普及について.....	42
参考資料1 ドキュメンタリー映像制作委員会議事概要.....	44
参考資料2 事前取材録.....	53
参考資料3 映像に関するアンケート.....	68

1 本事業の概要

(1) 背景と目的

①本事業の背景

平成 26 年 3 月に「良質かつ適切な精神障害者に対する医療の提供を確保するための指針（以下「指針」という。）」が定められ、「入院医療中心の精神医療から、精神障害者の地域生活を支えるための精神医療へ」と施策の方向性が示された。また、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律（以下「精神保健福祉法」という。）の平成 26 年 4 月の施行により、医療保護入院している精神障害者の退院促進に関する措置として、病院管理者が退院後生活環境相談員を選任し、退院支援に向けた環境整備等を構築できるようになるとともに、退院支援相談員を医療機関内に配置できるようになった。

平成 29 年 2 月の「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」報告書では、「入院医療から地域生活中心」という政策理念に基づく施策をより協力を推進して、精神障害者の一層の地域移行を地域において具体的な政策手段により実現していくため、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」という新たな政策理念が示された。

このような施策が実施されているものの、平成 29 年時点の患者調査においても、精神病床に 1 年以上の長期在院している患者は約 17 万人に上り、長期入院患者の退院理由は転院や死亡等によるものが多いという状況である。すなわち、精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができるための社会の基盤整備が完全にはなされていないとすることができる。このような実態を踏まえ、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を進めるにあたっては、精神科病院や地域援助事業者による努力だけでは限界があり、自治体を中心とした地域精神保健医療福祉の一体的な取組の推進に加え、地域住民の協力を得ながら、差別や偏見のない、あらゆる人が共生できる包摂的な社会を構築する必要があると考えられる。

このような社会を実現するために、これまで国、自治体、専門職団体を中心に精神障害者の地域移行支援に関する事例集やガイドライン¹が作成されてきた。これらの多くは、実務の観点から地域移行支援事業者が支援を行うノウハウや、専門職としてのかかわり方など様々な視点で整理がなされており、それぞれ参考になるものが多い。

また、精神疾患からのリカバリーやその過程を取りまとめた事例研究をまとめたガイドライン等も多く出されており、参考になるものが多い。

一方、これら事例集やガイドライン等の多くは支援のノウハウであったり、支援者の視点から見ての支援の在り方についての整理である場合が多く、長期入院している精神障害者本人が具体的にどのような支援を活用し、どういったことに悩み、どう乗り越えていったかを分かりやすく伝えきれていないことも多い。

そのため、支援者にとっては意義のあるものは多いが、長期入院している精神障害者本人が「退院する際の不安」などを解消するものはあまり多くないということが実情であり、また、家

¹ 例えば、日本精神保健福祉士協会（2017）「医療・福祉・行政関係者が共有して活用できる長期入院精神障害者の地域移行推進ガイドライン」、全国精神障害者地域生活支援協議会（2013）「地域移行・地域定着支援の充実強化に向けた事例収集とガイドライン」、古畑龍太（2015）「精神障害者の地域移行支援」など、直近のガイドライン等をもみても、様々なものが出されている。

族にとっても、支援者からの断片的な情報となってしまうことも多くある。すなわち、精神障害者本人やその家族、ひいては地域住民が退院する精神障害者について理解する機会がまだ充足していないのが実態ではないかと考えられる。

また、退院後の地域生活を送るためには、地域の一員として暮らすために本人がどうすべきかなど、生活を継続する上でのノウハウをしっかりと伝えることも重要であると考えられる。

②本事業の目的

以上のような背景から、本事業では、長期入院をしている精神障害者が地域移行を進めるにあたり、退院支援を入院中から受けて退院し、地域で生活するといった一連の流れを理解することが重要であると考えられる。したがって、その工夫や実践したことについて、精神障害者本人の視点で整理し、理解を促進する必要があると考えられる。

また、支援者が退院支援を実施する前の、精神障害者の入院生活に関心を持ち、退院から自立するまでの過程とその特徴を、生活の場面ごとに、精神障害者本人を主人公とした映像コンテンツとしてまとめ、その家族や関係者のかかわり方について、啓発することも重要である。それらの検討結果を踏まえ、退院プロセス（どんなところで困ったり、どんなことについて支援を受けたりできるのかなど）を記した映像コンテンツを制作することで現に長期入院精神障害者が退院に向けた動機付けとなることも目的とする。尚、普及に向けた示唆を得るため、制作した映像に対する評価も実施する。

作成した映像コンテンツは、精神障害者本人のみならず、家族や支援者、地域住民の理解促進にも活用できると考えられる。なお、この検討結果は、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築推進事業」等において普及のために報告等実施することも想定されてる。

(2) 事業内容

本事業は、前述の目的を実現するため、下記の4つの事業を実施した。

- ・ドキュメンタリー映像制作委員会の開催・運営
- ・既存啓発コンテンツ調査
- ・映像制作
- ・映像に対する評価

2 ドキュメンタリー映像制作委員会の開催・運営

(1) 目的

映像の制作方針や制作した映像の評価等、映像制作に関わる事項について専門家及び当事者の意見を得るため、長期入院経験のある方、長期入院経験者の地域での生活を支援している方を委員として委員会を組織し、より当事者の目線に立った映像制作を行う。

(2) 委員構成

前述の目的に鑑み、委員会の委員は、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の一構成要素である、長期入院精神障害者の退院後の地域生活に関する知見・専門性を有するアドバイザー1名と精神科病院での入院からその後、地域で生活している精神障害者である当事者委員5名を選定した。なお、委員に対しては、委員就任の依頼と併せて、委員会開催前のヒアリングを通じて、当事者の抱える問題意識を事前に把握することで、映像コンテンツの質の向上を図った。

表1 当事者委員（五十音順 敬称略）

氏名
岡本千夏
大喜田聡
藤城文男
柳尚孝
吉川進

表2 アドバイザー（敬称略）

氏名	所属
田村綾子	公益社団法人日本精神保健福祉士協会 副会長 聖学院大学 心理福祉学部心理福祉学科 教授・学科長

表3 オブザーバー（敬称略）

氏名（敬称略）	所属
小河原大輔	厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 精神・障害保健課 相談支援専門官
吉野智	厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害福祉専門官

表 4 事務局

氏名	所属
東海林崇	PwC コンサルティング合同会社 シニアマネージャー
古屋智子	PwC コンサルティング合同会社 シニアアソシエイト
木本留理子	PwC コンサルティング合同会社 アソシエイト
清水式子	PwC コンサルティング合同会社 スタッフ

(3) 開催スケジュールと議題

ドキュメンタリー映像制作委員会は、以下の内容で計3回開催をした。

表 5 委員会開催状況

開催日	会議名称	主な議題	出席委員
平成 30 年 9 月 9 日	第 1 回 ドキュメンタリー 映像制作委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・委員紹介 ・事業概要の説明 ・映像構成についての検討 ・映像出演者の選定 	田村、岡本、 大喜田、柳、 吉川
平成 30 年 11 月 5 日	第 2 回 ドキュメンタリー 映像制作委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・進捗共有 ・チャプター 1 たたき台映像の内容に係る検討 ・チャプター 2～4 映像内容の編集方針に係る検討 	田村、岡本、 大喜田、柳
平成 31 年 1 月 21 日	第 3 回 ドキュメンタリー 映像制作委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・たたき台映像の内容に係る検討 	田村、岡本、 大喜田、藤城

3 既存啓発コンテンツ調査

(1) 目的・調査対象

精神科病院からの地域移行を啓発するために制作された既存の映像資料と印刷資料を収集し整理することを目的に実施し、映像を制作する際の参考情報とした。

(2) 調査結果

①映像資料

過去の地域移行支援に関する映像資料から、以下の通り、計7作品を収集した。

表 6 映像資料

#	名称	制作元	形式	制作年月日	収録分数
1	旅立ちのとき	特定非営利活動法人 千葉県精神障害者自立支援 事業協会	・ドラマ ・インタビュー	平成 20 年	50 分
2	よりかごインタビュー	不明	インタビュー	平成 29 年	15 分 32 秒
3	よりかごインタビュー	不明	インタビュー	平成 29 年	7 分 50 秒
4	よりかごインタビュー	不明	インタビュー	平成 29 年	15 分 4 秒
5	タイトルなし	特定非営利活動法人じりつ	インタビュー	不明	14 分 45 秒
6	完成版 2 (特定のタイトルなし)	地域生活支援センター すみよし	インタビュー	平成 28 年	9 分 4 秒
7	Kさん動画 (特定のタイトルなし)	宮崎市 障がい者自立支援協議会	ドキュメンタリー	平成 29 年	10 分 50 秒

各映像資料にて盛り込まれている情報を、日本精神保健福祉士協会が作成した地域移行支援のフロー²にもとづき整理をした。日本精神保健福祉士協会の示した地域移行支援のフローでは、入院期間を「導入期」「初期」「中期・後期」、退院後については「地域定着期」の計4期間に分け、それぞれの期間における本人を含めた支援機関の関わり方について整理している。各期間の内容は、以下の通りある。

- ・導入期：本人が退院希望をし、地域移行支援のサービス申請をするまでの期間
- ・初期：本人が地域移行支援の申請をし、支給決定されるまでの期間
- ・中期・後期：地域移行支援計画に沿って居住の場、日中の活動先、通院先などを決めていく期間
- ・地域定着期：退院後、落ち着いて地域生活ができるよう支援していく期間

² 日本精神保健福祉士協会（2017）「医療・福祉・行政関係者が共有して活用できる長期入院精神障害者の地域移行推進ガイドライン」より引用した。

表 7 映像資料内の掲載情報と映像資料内容内訳

地域移行 支援フロー	導入期	初期	中期・後期	地域定着期
掲載情報	<ul style="list-style-type: none"> ・退院しようと思ったきっかけ ・退院を決心する前の退院に対する思い ・退院を決心するまでの支援内容 ・自立支援員や PSW との面談内容 ・退院できることになった時の気持ち 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域移行支援導入までの流れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域移行支援計画に基づいた、退院までの支援内容 ・退院に対する不安内容 ・退院に対する不安の対処法 	<ul style="list-style-type: none"> ・退院後の生活 ・退院後に受けている支援内容 ・退院後の気持ちの変化 ・退院して良かったこと ・退院後の楽しいことや苦勞していること ・退院後の自身の変化 ・退院後の不安の対処法 ・今後の目標 ・緊急時の対応
映像資料	1	○		○
	2	○		○
	3			○
	4			○
	5			○
	6		○	○
	7	○		○

②印刷資料

本事業目的と合致している地域移行支援に関連する印刷資料を、以下の計9作品収集した。

表 8 印刷資料一覧

#	カテゴリ	表題	地域	発行者
1	冊子	前橋市 地域移行支援・地域定着支援ハンドブック ～私たちはこんな風にして地域へ出て、 暮らし続けていきませんか～	群馬県	前橋市自立支援協議会： 地域移行・地域定着部会
2	冊子	昔ニートだった私の日記	神奈川県	夏木絵里 (当事者作成の漫画)
3	パンフレット	神奈川県における地域移行・地域定着支援 事業とは？	神奈川県	精神保健福祉センター 社会復帰課
4	パンフレット	精神科病院からの地域移行支援	大阪府	大阪市
5	パンフレット	入院・入所している方へ あなたらしい生活はどんな生活ですか？ ～地域移行支援・地域定着支援のご案内～	三重県	紀北地域協議会 こころ部会
6	パンフレット	困ったときはだれにきく？ あなたのお助け帳	三重県	紀北地域協議会 こころ部会
7	パンフレット	ご家族の方へ 退院・対処に向けての制度 ～地域移行支援・地域定着支援のご案内～	三重県	紀北地域協議会 こころ部会
8	パンフレット	病院・事業所の方へ 地域移行支援・地域定着支援事業のご案内	三重県	紀北地域協議会 こころ部会
9	パンフレット	地域移行支援・地域定着支援サービスの ご案内	兵庫県	神戸市

印刷資料に掲載されている情報を収集し、以下の6つのカテゴリで整理した。

表 9 印刷資料内の掲載情報と印刷資料内容内訳

掲載項目	地域移行支援 ・地域定着支援 の概要	支援内容	支援の 受給対象者	元患者の声 ・事例	相談窓口リスト	
具体的な 情報	<ul style="list-style-type: none"> ・地域移行支援、地域定着支援、一般相談支援事業者の定義 ・支援の受給対象者 ・支援内容 ・利用方法 ・利用期間 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域生活に関する相談 ・障害福祉サービス(生活介護や自立訓練等)の体験利用 ・体験宿泊 ・地域移行支援計画の作成等 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科病院の入院患者 ・施設へ入所している精神障害者等 	<ul style="list-style-type: none"> ・退院を志すきっかけ ・地域での生活について ・地域での活動等 	<ul style="list-style-type: none"> ・当該市のヘルパー事業所、就労支援事業所、グループホーム、訪問看護ステーション、相談支援事業所の連絡先一覧 等 	
印刷資料	1	○	○	○	○	○
	2	○	○		○	
	3	○			○	○
	4	○	○	○	○	○
	5		○	○		○
	6		○		○	○
	7	○				○
	8	○	○	○		
	9	○	○	○	○	

4 映像制作

(1) 全体像

前述の通り、平成 29 年時点の患者調査においてなお、1 年以上の長期入院患者数は約 17 万人に上ることから、長期入院をしていた精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができるよう、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を進める必要がある。このような状況を踏まえ、精神障害等にあまり接点のない一般市民に加えて、精神障害者の家族や精神障害者の支援者を目指している学生等の関係者が、精神障害や精神障害者の現状を知り、その理解に繋がること、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を推進する上で重要であると考えられる。そこで、ドキュメンタリー映像は、以下の 2 つの目的を満たすものとして作成した。

- ・ 障害等にあまり接点のない一般市民が、精神障害や精神障害者の地域での生活について知ること
- ・ 精神障害者の家族や精神障害者の支援者を目指している学生等の関係者が、精神障害者が地域で生活するために必要なサービスや支援方法について知ること

また、映像はダイジェスト編、本編及び導入編の 3 部構成とし、各編は以下のすみ分けに則り制作し、各コンテンツの取り扱う内容も整理した。

表 10 各編のすみ分け

		ダイジェスト編	本編	導入編
本編との関連		視聴者が本編の視聴に興味を持つきっかけとなる映像	—	視聴者が本編の映像内容に関する制度や社会的背景を理解する映像
視聴場面（想定）		動画サイト（映像の格納場所）や、動画サイトの URL が掲載されているサイト	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本精神保健福祉士協会や地域での、支援者向けの研修会 ・ 学生等を対象とした福祉系大学等での講義 ・ 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築推進事業 等 	
コ ン テ ン ツ	映像全体の趣旨	○		○
	主人公像	○	○	
	現在の生活の特徴	○	○	
	過去のこと	○	○	
	現在の生活	○	○	
	今後のこと	○	○	
	制度・社会的背景	○		○

(2) ダイジェスト編

①制作方法

ダイジェスト編の制作では、下記ア、イを実施した。

ア. 構成

イ. 編集

②制作スケジュール

以下のスケジュールで、構成内容を基に計2回編集をした。

表 11 制作スケジュール (ダイジェスト編)

実施事項	実施時期
構成	1月中旬
編集1回目	2月初旬～2月中旬
編集2回目	2月中旬～3月初旬

③構成

以下のコンテンツを盛り込み、本編の視聴に興味を持つきっかけとなる映像となるよう構成した。

- ・本映像の趣旨を端的に説明した内容
- ・本編映像の特徴的な場面を示した内容

④編集

構成内容を基に制作したたたき台映像に対し、オブザーバーと有識者から収集した以下のご意見を基に編集を行った。

表 12 編集に関するご意見 (ダイジェスト編)

実施事項	主なご意見
編集1回目	<ul style="list-style-type: none">・チャプター5の、当事者に対する最後のメッセージ（入院を強いられている人たちに一歩踏み出す呼びかけ）を加えてはどうか。・冒頭で精神障害患者数を明示しなくても良いのではないかと
編集2回目	<ul style="list-style-type: none">・本映像は地域での生活に焦点を当てているため、地域で生活をしているシーンを増やしてはどうか。・全てのチャプターの概要を示した方が良い。・視聴者に長期入院期間を理解してもらうため、期間を示す場面の尺を長めにとってはどうか。

(3) 本編

①制作方法

前述の目的を念頭に置き、下記ア～オのプロセスで本編を制作した。

- ア. 出演者の選定
- イ. 事前取材の実施
- ウ. 構成
- エ. 撮影
- オ. 編集

②出演者の選定

出演者は以下の 5 名を選定した。5 名ともそれぞれ自立するまでの過程において様々な経験をし、長期の精神科病院での入院生活の後、地域生活を開始しており、様々な地域生活者がいることを視聴者に伝えることができると考えられる。

- 出演者1 出演者像：50 代女性、3 年間の入院期間を経て約 3 年前に退院
利用サービス：計画相談支援、共同生活援助、就労継続支援 B 型
概要：元々プロの漫画家のアシスタントをしていた。発症を機に漫画家になる夢を諦めたが、就労継続支援 B 型事業所での活動をきっかけに、再び漫画制作に取り組んでいる。
- 出演者2 出演者像：40 代男性、複数回の入退院を繰り返したのち約 5 年前に退院
利用サービス：計画相談支援、共同生活援助、地域活動支援センター
概要：病気と向き合うことができなかったという過去の経験を踏まえ、現在はピアサポーターとして、同様の経験のある仲間の助けになろうと精力的に活動をしている。
- 出演者3 出演者像：50 代男性、30 年間の入院期間を経て約 1 年前に退院
利用サービス：計画相談支援、共同生活援助、自立訓練（生活訓練）、地域活動支援センター、日常生活自立支援事業
概要：地域での生活を通し、入院中は攻撃的な性格だったが退院後は穏やかな性格に変化した。また、ようやく手に入れた自由な生活を楽しみ、今の生活が充実していると話す。
- 出演者4 出演者像：50 代女性、14 年間の入院期間を経て約 4 年前に退院
利用サービス：計画相談支援、就労継続支援 B 型
概要：他者に頼りにされていることがモチベーションとなり、就労継続支援 B 型事業所で活動している。また、共に支え合うパートナーと共に、今後は他者を元気にすることができる存在になるという目標を掲げている。
- 出演者5 出演者像：60 代男性、7 年間の入院期間を経て約 2 か月前に退院
利用サービス：訪問看護
概要：入院中に思い描いていた”辞書研究”に没頭するという生活を実現し充実した毎日を送っている。

③制作スケジュール

出演者の決定時期が異なったため、チャプター1、チャプター2～4、チャプター5の3つに区分し、並行して制作作業を進めた。

表 13 制作スケジュール (本編)

#	実施事項	実施時期
チャプター1	出演者の選定	11月末
	事前取材	11月26日
	構成	12月初旬
	撮影	1月10日
	編集1回目	1月中旬
	編集2回目	1月下旬
	編集3回目	2月中旬～3月初旬
チャプター2・3・4	出演者の選定	9月初旬～9月末
	事前取材	9月27日、10月3日
	構成	9月末～10月中旬
	撮影	11月10日、11月14日、11月15日
	編集1回目	11月末～12月初旬
	編集2回目	1月中旬
	編集3回目	1月下旬
	編集4回目	2月中旬～3月初旬
チャプター5	出演者の選定	9月初旬～9月末
	事前取材	9月25日
	構成	9月末～10月初旬
	撮影	10月7日
	編集1回目	10月中旬～11月初旬
	編集2回目	11月末～12月初旬
	編集3回目	1月中旬
	編集4回目	1月下旬
	編集5回目	2月中旬～3月初旬

④制作前事前取材の実施

既存啓発コンテンツ調査で整理した情報を踏まえ、各チャプターの主人公の特徴や実際の生活に沿った映像内容を検討するため、撮影前に出演者に対して、以下の内容の事前取材を行った。その上で、特に映し出したい主人公の特徴を深掘りをした。取材録は参考資料1「事前取材録」を参照。

(長期入院から退院までの体験について)

- ・入院中の退院に対する想いとその理由
- ・退院をすることになったきっかけ
- ・退院が決定してから退院をするまでに受けた支援
- ・退院が決定した時の気持ち 等

(退院をしてからの地域での生活について)

- ・地域での生活を始めてから困難だったことと必要だった支援
- ・現在受けている支援やサービス
- ・現在の生活で楽しいこと
- ・今後の目標 等

⑤構成

事前取材で収集した情報に基づき、以下の項目で構成表を作成した。

- ・構成要素
- ・撮影場面
- ・インタビュー・ナレーション内容
- ・テロップ内容

作成した構成表に対する、当事者委員、オブザーバー、有識者から収集した意見を基に内容の修正を行い、撮影に臨んだ。

(主人公像)

- ・一般の視聴者が主人公への理解を深めるため、基本情報として病歴や職歴、入院前の生活の情報を追加する

(過去のこと)

- ・長期入院患者が多い理由を説明する
- ・障害との向き合いは仲間がいるからこそできるため、仲間との関わりを追加する
- ・主人公が病気について語る映像では、視聴者が統合失調症について理解できる内容とする
- ・長期入院を経て退院に至った経緯を説明する

(現在の生活)

- ・B型事業所での作業シーンは、主人公のみではなく他利用者と作業をしている場面を映す
- ・グループホームでの生活の様子を撮影シーンとして追加する

- ・長期入院の影響を示すため、一般の人にとっての当たり前の生活に幸せを感じている当事者の様子を捉えられると良い

⑥撮影

撮影は、インタビュアーと統括プロデューサー³、カメラマンの計3名体制で実施した。

撮影の際には、主人公、主人公以外のインタビュー対象者及び映像に映り込む方より出演承諾書を取得し、撮影を行った。

⑦編集

全体を通して、編集をする際には以下の点に留意をした。

- ・全ての場面でルビ入りの字幕を挿入する。
- ・サービス名等の用語は、法令用語に準ずる。同様の用語が複数回出てくる場合、初回は正式名称、以降は略称とする。また、テロップで解説文を挿入する。
- ・ナレーションの役割は、補足情報の説明や場面のつなぎとする。出演者の発言内容を中心に編集する。

各チャプターの撮影時期が異なったため、委員会やアドバイザー・オブザーバーとの打ち合わせのみならず、メールによる意見収集を行い、撮影時期が遅いチャプターに関しても、様々な編集に対する意見を収集する工夫をした。当事者委員、オブザーバー及び有識者から収集した以下のご意見を基に、計3～5回の編集を行った。

コンテンツについて

(過去のこと)

- ・診断変更の経緯を入れる
- ・現在とは異なる入院中の性格は症状によるものであることを説明する

(現在の生活)

- ・主人公の生活をイメージできるよう、1日の生活を時系列で説明する
- ・現在とは異なる入院中の性格は症状によるものであることを説明する
- ・受けている支援・サービスによる効果がわかるようにする
- ・パートナーとの支え合いがコンセプトの1つであるため、パートナーとの関わりがわかるシーンを活用する

表現について

(わかりやすさ)

- ・インタビューの切り取りで分かりにくくなっている箇所は、字幕で補う
- ・主人公以外のインタビュー回答者は何者か、掲載する
- ・専門用語(ピアサポーター、生活訓練等)は解説を入れる
- ・疾患についての誤解を防ぐため、長期入院の理由に関する社会的背景等を説明する

³ 映像を制作する際に、映像の全体管理をし、質の担保をする役割を担う。

(興味をもたせる工夫)

- ・ インタビューシーンのみならず、出演者の生活のシーンを多く活用する
- ・ 内容が重複する箇所はどちらかをカットし、映像時間を短縮する
- ・ 音楽が単調のため、シーンに合わせた音楽を活用する

⑧制作した映像内容

本編は、以下の通り計5つのドキュメンタリー映像から成る。

「地域生活を送る精神障害者を知ろう」

- ・ チャプター1

「描き続ける夢 ～入退院を繰り返して得た、好きなことが当たり前にできる幸せ～」

- ・ チャプター2

「自分と向き合う勇気 ～ピアサポーターの仲間たちと踏み出す、新たな一歩～」

- ・ チャプター3

「取り戻した笑顔 ～支援者に支えられ、30年越しの退院で得た自由～」

- ・ チャプター4

「支え合う幸せ ～パートナーとの出会い、就労訓練を通して得た自信～」

- ・ チャプター5

「私らしく生きる ～入院中からこだわり続けた、辞書研究に没頭する生活～」

表 14 チャプター 1 構成表

#	撮影場面	構成要素	インタビュー(Q&A)・ナレーション(NA)内容	テロップ内容
1	<p>・冒頭で出演者についての概要説明</p> <p>・1日の生活の流れイメージ</p>	概要説明	<p>NA) 東京都東部。長期の入院生活を終え、描き続ける夢に向かって日々励む、50代の女性がいる。彼女は、25年前、仕事でのストレスを機に統合失調症を発症した。</p> <p>それ以降、1年以上の入退院を繰り返し、およそ3年前に退院。現在は GH に入居し、就労訓練を行うための、就労継続支援 B 型事業所に通いながら、漫画家デビューに向け、制作活動に励んでいる。</p> <p>彼女の1日の生活は、まず毎朝6時頃起床、朝7時に GH で朝食を済ませ、9時頃バスと電車を乗り継いで1時間ほどの B 型事業所に通っている。</p> <p>B 型事業所での作業は、彼女の能力を活かしたイラスト制作。昼の3時頃には作業を終え、夕方4時頃帰宅する生活を送っている。</p> <p>漫画家になるという夢を追い続ける、彼女の生活とはどのようなものなのだろうか。</p>	
2	・GH でのインタビュー	発症の経緯、直近3年間の入院生活、退院に至る経緯を本人の言葉で解説	<p>Q&A) 発症の経緯。漫画家のアシスタントをしていた時に、病気になった。</p> <p>NA) 漫画家のアシスタントとして仕事を始めた彼女。当時の業務で、からだに無理がかかってしまい、統合失調症を発症してしまう。その後、入退院を繰り返すことになるが、その当時の様子を振り返ってくれた。</p> <p>Q&A) 発症から退院までの経緯。発症後は入退院を繰り返した。直近では3年間の入院を経て、退院した。</p>	
3	・GH でのインタビュー	長期入院の理由について	<p>NA) 3年間の長期入院を経験した彼女。なぜ彼女は退院することができず、長期入院をしなくてはならなかったのか。その理由を聞いてみた。</p> <p>Q&A) 長期入院の理由。一度1人暮らしに失敗してから長く入院生活が続いた。GH の話を聞いてから、退院の話が進んだ。</p> <p>NA) GH の存在を知ったことが彼女の退院を実現した、大きなポイントだったようだ。</p>	グループホーム…世話人のサポートを受けながら、共同生活をする住居

4	・事業所での作業風景、インタビュー	就労継続支援 B 型事業所でのイラスト・漫画制作について	<p>NA) 退院後、彼女は週に 1 回「就労継続支援 B 型事業所」での活動に取り組んでいる。この事業所では、全国でも珍しく、イラスト制作等の作業を行っており、彼女も漫画家アシスタント時代に培った経験を活かして、イラスト制作に取り組んでいる。</p> <p>この事業所での具体的な活動内容について、話してくれた。</p> <p>Q&A) 就労継続支援 B 型事業所での活動。イラストや漫画の作品を制作し、出展したりもしている。</p> <p>NA) 自分のペースで、イラスト制作の作業に励む彼女。週に 1 回、この事業所で作業を行うことは、彼女にとってどのような意味があるのだろうか。</p> <p>Q&A) 週に 1 回通うだけでも、気持ちや身体のリズムを整えられる。</p>	就労継続支援 B 型…一般企業での就労が困難な人に、就労や生産活動の機会を提供するサービス
5	・GH でのインタビュー、制作したイラスト	診断名の変化がもたらした、心の安定について	<p>NA) 週に 1 回、就労継続支援 B 型事業所に通うことで、心とからだのリズムを整えることができているようだ。もう 1 つ彼女の心を安定させる大きな出来事があったと言う。</p> <p>Q&A) 統合失調症から発達障害に診断が変わった。もやもやしていたものが晴れて、安定した。</p> <p>NA) 入院中も欠かさずイラストを描いていた彼女。その当時の体調や心の状態が、描くイラストにも反映されていたようだ。</p> <p>Q&A) 入院中のイラストは、心の弱さが出て優しいタッチになっている。徐々にはっきりした線を描けるようになり、現在のイラストには強さが出ている。以前は、描くことが怖く、主張ができなかった。</p>	

6	・ GH でのインタビュー	<p>現在長期入院をしている方たちに対する思い</p> <p>今後の目標、夢について</p>	<p>NA) 現在では、自分らしさを取り戻し、それが描くイラストにも反映されるようになったようだ。過去の自分と同じように、今長期入院をしている方たちに向けて、想いを話してくれた。</p> <p>Q&A) 自分のやりたいことがある場合は、退院してやった方が良い。当たり前の方が当たり前でできることが、すごく幸せなことだと、今気づいている。入院期間はもっと短くても良かったと、今は思う。</p> <p>NA) 最後に、今後の目標と夢について聞いてみた</p> <p>Q&A) 精神的にも経済的にも自立していきたい。漫画を自分の書きたいようにかけるようになっていたら、嬉しい。</p> <p>NA) 好きなことが当たり前でできる幸せを手に入れた彼女。次は、長年描き続けた夢を叶えるため、一歩ずつ前に進んでいる。</p>	
---	---------------	--	--	--

表 15 チャプター 2 構成表

#	撮影場面	構成要素	インタビュー(Q&A)・ナレーション(NA)内容	テロップ内容
1	<p>・冒頭で出演者についての概要説明</p> <p>・1日の生活の流れイメージ</p>	概要説明	<p>Na) 北海道砂川市、自身の経験を活かし、精神障害者の仲間たちとともに、活動する、40代の男性がいる。</p> <p>彼は、自身の病気と正面から向き合うことで、行き詰まっていた人生から抜け出し、大きな一歩を踏み出している。</p> <p>27歳の時に統合失調症を発症。それ以降、複数回の入退院を繰り返し、約5年前に退院。</p> <p>精神障害により、同じ想いで苦しむ仲間たちと支え合いながら生活を送っている。</p> <p>彼の1日の生活は朝7時、起床。</p> <p>朝食を済ませた後は、地域活動支援センターに足を運び、精神障害をもつ仲間たちとの時間を過ごしている。</p> <p>自身の経験を社会に役立てるため、定期的に開催される仲間たちとの活動にも参加。</p> <p>精神障害をもつ当事者同士で支え合うピアサポート活動に取り組んでいる。</p> <p>精神疾患を患う前は仕事に励む彼だったがある日を境に、病を抱えることになる。</p>	
2	・GHでのインタビュー	<p>1回目入院までの経緯。</p> <p>統合失調症が本人に及ぼす影響を実体験をもとに解説</p>	<p>Q&A) 1回目の入院までの経緯。飛び降り自殺を試みたエピソード。</p> <p>NA) 1回目の入院について話してくれたように、仕事のプレッシャーから精神疾患を患ってしまった彼。</p> <p>その後、別の仕事に就くも、病状は悪化する一方である出来事が起こってしまう。</p> <p>Q&A) テレビでの放映されていたアニメを視聴し、そのキャラクターが亡くなることで、自身の死を意識してしまう。自殺を試み、入院。その際、統合失調症と診断される</p>	

3	・GH でのインタビュー	入院中の様子を解説	<p>NA)「統合失調症」と診断されてから2度目の入院。入院当時の状況を振り返ってくれた。</p> <p>Q&A) 入院当時は、誰とも話さずに過ごしていた。どうせ誰もわかってくれない。周囲が自分を攻撃するのでは?と感じていた</p>	
4	・GH でのインタビュー	病気を受け入れることができなかった過去	<p>NA) 2度目の入院時は、誰とも話すことなく、心を閉ざしてしまっていた彼。</p> <p>その後、退院し、通院しながらの生活を送ることになるが、自身が精神障害者であることを、なかなか受け入れることができなかったようだ。</p> <p>Q&A) 通院は続けていて、病気という自覚はあったが、病気と正面から向き合うことができず、服薬を怠ることが多かった</p>	
5	・GH でのインタビュー	<p>入退院を繰り返す中で本人の心境の変化</p> <p>病気と向き合うことができるようになったきっかけ</p>	<p>NA) 自身の病と正面から向き合えず、薬を飲み続けることができなかった彼。</p> <p>その結果、病状が悪化し、入退院を繰り返していたが、ある入院をきっかけとして彼の心に変化が起きたようだ。</p> <p>Q&A) 入院患者とふとしたきっかけで会話をするようになった。話を聞いてもらう、話を聞くことで、自身の理解者がいることに気づき、病気に対して正面から向き合えるようになった。その結果、薬も欠かさず飲むようになり、回復へと向かう</p> <p>NA) 自分自身の病気と向き合うことで、大きな一歩を踏み出せた彼。1か月ほど前までは、一般就労をしていたが、体調を崩して退職し、次の就労に向け体調を整えている</p>	

6	<p>・ピアサポートセンター「てくてく」でのインタビュー</p>	<p>ピアサポーターについての解説</p> <p>ピアサポーターによる活動や「てくてく」の紹介</p>	<p>NA) 現在は、同じ経験・同じ課題を持つ、精神障害者の仲間たちと支えあうピアサポート活動をピアサポーターの1人として、積極的に行なっている。</p> <p>さらに、ピアサポート活動を、広めていくために仲間達と結成した。「てくてく」という当事者組織にも所属し、定期的に活動を続けている。</p> <p>Q&A) 「てくてく」というピアサポートセンターの活動意義、活動内容は？「マル秘話し会」というイベントが好評だった</p> <p>NA) この「マル秘話し会」を立案したのは入院時代、周囲と話をすることができなかった彼本人だった。</p> <p>Q&A) 「てくてく、マル秘話し会」を企画した経緯は？</p>	<p>ピアサポート…同じ立場・同じ課題に直面している方が、仲間として支えあうこと。</p> <p>ピアサポーター…ピアサポート活動を行う、同じ精神障害者の仲間たち</p>
7	<p>・ピアサポートセンター「てくてく」でのインタビュー</p>	<p>なぜピアサポーターとして活動しているのか？</p> <p>ピアサポーターとして活動するやりがい</p>	<p>NA) 自身の経験を活かし、現在では、ピアサポート活動に励む彼。なぜ、このピアサポーターを務めようと思ったのだろうか。</p> <p>Q&A) ピアサポーターを始めたきっかけ。当初は、どんな活動かわからず参加した。現在では、自分のためにもなるため活動している</p>	
8	<p>・ピアサポートセンター「てくてく」でのインタビュー</p>	<p>本人の夢、目標</p>	<p>NA) 最後に自身の夢、目標について聞いてみた。</p> <p>Q&A) もう1度、仕事に就き、一人暮らしをしたい。</p> <p>NA) 入退院を繰り返し障害と向き合う力を身につけた彼はいま、仲間と共に新たな人生を歩んでいる</p>	

表 16 チャプター3 構成表

#	撮影場面	構成要素	インタビュー(Q&A)・ナレーション(NA)内容	テロップ内容
1	<ul style="list-style-type: none"> 冒頭で出演者についての概要説明 1日の生活の流れイメージ 	概要説明	<p>NA) 北海道砂川市、長期入院から社会復帰を目指す、50代の男性がここにいる。</p> <p>彼は生まれつき知的障害をもっていたが、19歳の頃、統合失調症を発症し、入院。彼は30年の入院生活を経て、いま、社会復帰を目指している。</p> <p>彼の1日の生活は、まず毎朝7時、起床。住まいのGHにて朝食を済ませ、8時頃、送迎車に乗り、車で5分ほどの生活訓練を実施する事業所で自立に向けた、生活訓練に取り組んでいる。</p> <p>作業内容は、食品を入れる容器の清掃や書類の裁断、事業所の清掃など。事業所に併設されたカフェで、作業終わりにコーヒーを飲むのが、彼にとって、一番の楽しみでもある。</p> <p>また生活訓練の後には、地域活動支援センターに立ち寄り、同じように精神障害をもつ人たちと思いの時間を過ごしている。</p> <p>30年という長い年月を病棟の中で過ごした彼が目にした、社会での生活はどのようなものなのだろうか。</p>	
2	<ul style="list-style-type: none"> カフェでのインタビュー 長期入院していた病院の担当者へのインタビュー 	入院時の振り返り	<p>NA) 今では笑顔が印象的な彼だが、入院時の自身について振り返ってくれた。</p> <p>Q&A) 入院当時は、他の患者からイビられ、イライラして暴力行為もあった。</p> <p>NA) 統合失調症の症状もあり、入院時は今とは真逆な性格だった彼。彼の退院を支援した担当者からも、入院時の彼について、話を聞いてみた。</p> <p>Q&A) 入院中は、周囲のとのコミュニケーションがうまくいかず、退院は難しいと考えていた。</p>	

3	・長期入院していた病院の担当者へのインタビュー	地域移行支援の利用について	<p>Na) そんな彼が社会復帰の一步を踏み出すには、多くの支援者の力があつた。具体的にどのような支援があつたのだろうか。</p> <p>Q&A) 地域移行支援を利用しての、退院に至る経緯。ピアサポーターの存在。</p>	地域移行支援…病院等に入院している方が、地域で生活を送れるようにするための支援
4	・地域活動支援センターでのインタビュー	ピアサポーターについての紹介	<p>Na) 話にあがつた、ピアサポートとは、同じ立場・同じ課題に直面している方が、仲間として支えあうこと。ピアサポーターは、そのピアサポート活動を行う、同じ精神障害者の仲間たちだ。</p> <p>入院時は、怒りっぽい性格でコミュニケーションに問題が多かつた彼だが、ピアサポーター等の様々な支援者の存在により、彼は心を開くようになった。</p> <p>Q&A) 支援者たちが自分に対して、自然な形で接してくれたことで、心を開くことができた。</p> <p>NA) 入院中から彼との関わりがあつたピアサポーターの一人が出会つた当時について話してくれた</p> <p>Q&A) 出会つた当時は緊張していたがすぐに打ち解け合うことができた。30年間、退院することを諦めずにいたことは尊敬をしている。</p>	<p>ピアサポート…同じ立場・同じ課題に直面している方が、仲間として支えあうこと。</p> <p>ピアサポーター…ピアサポート活動を行う、同じ精神障害者の仲間たち</p>
5	・生活訓練事業所での作業風景、インタビュー	<p>生活訓練で行われている作業内容</p> <p>出演者の仕事を通じて感じていること</p>	<p>NA) 多くの支援者の力によって退院した彼は、現在、日常生活能力等の向上のため、週に数回、生活訓練事業所で生活訓練に取り組んでいる。</p> <p>初めて経験する事業所での生活訓練。彼に具体的な作業内容について話を聞いてみた。</p> <p>Q&A) 具体的な仕事内容に関して。仕事をしていることにより、充実感をもって生活している。</p>	生活訓練…地域生活を送るための日常生活能力を向上させるための訓練

6	・仕事終わりのカフェでのインタビュー	日常の中で何をモチベーションとしているのか	<p>NA) 生活訓練を終え、作業終わりに必ず立ち寄るのが、事業所に併設されたカフェ。ここで、お気に入りのコーヒーを飲む時間が格別だそうだ。</p> <p>Q&A) カフェを利用する楽しみ（美味しいコーヒーについて）、入院時は、経験することができなかった楽しみが今あり、毎日が充実している。</p>	
7	・生活訓練事業所の担当者へのインタビュー	生活訓練事業所の利用を通じた出演者の変化	<p>NA) これからの夢は？と尋ねると、今が充実しているので、特に夢は無い、と話してくれた彼。そんな彼の生活の基盤にもなっている事業所の担当者は、利用を開始した当時をこう振り返る</p> <p>Q&A) 利用開始当時の出演者の様子、利用開始からの変化。出演者への指導に関して、意識していること。</p>	
8	・地域活動支援センターでのインタビュー	出演者本人が感じる自身を取り巻く環境に関して	<p>NA) 彼自身の強い意志と周囲の支援によって実現した、今の生活。今、自分を取り巻く環境についてどう感じているか、話をしてくれた。</p> <p>Q&A) 周囲を取り巻く人たちについて</p> <p>NA) 30年という、長い入院生活を経て、彼は、いま、様々な支援を受けながら「自由」な人生を手に入れ、充実した毎日を過ごしている</p>	

表 17 チャプター4 構成表

#	撮影場面	構成要素	インタビュー(Q&A)・ナレーション(NA)内容	テロップ内容
1	<p>・冒頭で出演者についての概要説明</p> <p>・1日の生活の流れイメージ</p>	概要説明	<p>NA) 富士山のふもと静岡県東部。</p> <p>長期の入院生活を終え、就労機会を得る喜びと、パートナーと支え合うことの幸せを掴んだ、50代の女性がいる。</p> <p>彼女は、統合失調症により、14年間の入院生活を経て、およそ4年前に退院。現在は、就労訓練を行うための、就労継続支援B型事業所に通いながら、一人暮らしをしている。</p> <p>彼女の1日の生活は、毎朝5時ごろ起床。自宅で朝食を済ませ、朝7時ごろ、事業所に向かうため最寄りの駅へ。途中、パートナーと合流し、2人一緒に事業所へ向かう。活動内容は、農場での畑作業。昼の3時ごろには畑作業を終え、夕方4時半ごろに帰宅する生活を送っている。</p> <p>彼女が経験した長い入院生活と、いま、ようやく手にすることができた幸せな生活というのは、どのようなものなのだろうか。</p>	
2	・自宅でのインタビュー	入院までの経緯、直近14年間の入院生活、退院に至る経緯を本人の言葉で解説	<p>Q&A) 入院までの経緯。海外生活を終え、帰国した際に昼夜逆転の生活で体調を崩す。入退院を繰り返し、直近では14年間の入院を経験。自身の境遇に対して精神的に辛く、毎晩涙する日々だった。</p> <p>NA) 彼女は、14年間の入院生活を長くて辛かったと語る。その長い入院生活を終えることができた経緯について話してくれた。</p> <p>Q&A) 退院までの経緯。主治医が変更になり、二人三脚で退院に向けた訓練が始まった。結果、日常生活で自分自身でできることが増え、退院へと向かった。退院が決まった時は、嬉しくて涙を流した。</p>	措置入院…精神障害者の入院形態の1つ。自傷他害の恐れがあるため入院が必要な方を対象とする。

3	・事業所へ向かう途中でのインタビュー	現在、心の支えになっているパートナーについて	<p>NA) 退院後、一人で暮らす彼女には現在、交際をしているパートナーがいる。入院時代に知り合い交際をスタートした彼の存在は大きく、彼女の心の支えになっている。</p> <p>Q&A) パートナーと出会った経緯。パートナーは、自身にとって、どんな存在か？出会ったことで自身の人生観が大きく変わった。</p> <p>NA) 心の支えとなっているパートナーに、彼女との関わりについて聞いてみた。</p>	
4	・就労継続支援 B 型事業所での作業風景、インタビュー	事業所での農作業について	<p>NA) 支え合うパートナーができたことで精神的にも安定することができた彼女。もう1つ、「就労継続支援 B 型事業所」での活動も、彼女の心を支える大きな役割になっているようだ。</p> <p>Q&A) 具体的な作業内容は？農作業をしている。農作業を経験して感じる、やりがい。ずっと社会貢献できることに組み込まれた。</p>	就労継続支援 B 型…一般企業での就労が困難な人に、就労や生産活動の機会を提供するサービス
5	・自宅でのインタビュー	退院後の生活や今後の目標について	<p>NA) 最後に、改めて今の生活について、そして今後の目標について話を聞いてみた</p> <p>Q&A) 社会貢献したいという気持ちについて。活動をしていて頼りにされることがモチベーションになっている。パートナーがいることで充実した生活を送ることができている。将来の夢について。人生は1度きり。障害もときには夢に変えることができる。</p> <p>NA) 長期入院から退院し、地域での活動により自信を取り戻した彼女。いまは、大切なパートナーとともに、大きな目標に向かって力強く生きている。</p>	

表 18 チャプター5 構成表

#	撮影場面	構成要素	インタビュー(Q&A)・ナレーション(NA)内容	テロップ内容
1	<p>・冒頭で出演者についての概要説明</p> <p>・1日の生活の流れイメージ</p>	概要説明	<p>Na) 山形県天童市、長期の入院生活を終え、入院中に思い描いていた生活を手に入れた、60代の男性がいる。</p> <p>23年前、彼は統合失調症と診断された。統合失調症の症状が原因で怒りやすく、乱暴な言動等があったことで、周囲の負担が大きく、およそ7年前に入院。</p> <p>入院生活中、退院したいという意思を何度も周囲に伝えていたが、長い間、退院をすることができずにいた。しかし、周囲の支援のもと、退院後の住まいを見つけることができ、およそ2か月前に退院。念願の地域での生活を実現し、いまはアパートで一人暮らしをしている。</p> <p>彼の1日の生活は、まず毎朝8時頃、起床。午前中は自宅でライフワークにしている辞書研究に没頭する。正午ごろ、自炊した食事で昼食。午後は、食材や書籍の買い出しなどで外出し、夜は、就寝するまで、再び辞書研究に取り組んでいる。</p> <p>好きなことに没頭することができる生活を手にした彼。しかし、そんな彼の手記には、一般の方々に対する強い訴えが記されている。</p> <p>「精神障害当事者も、それなりに一所懸命にいろいろなことに取り組んでいることを重く受け止めてほしい。精神障害当事者にも光を当ててほしい。もっと深い愛を持って接してほしい。」7年越しに退院をすることができた彼は今、どのような想いで毎日を過ごしているのだろうか。</p>	

2	・自宅でのインタビュー	統合失調症と診断された 本人の思い	<p>Q&A) 入院した期間について。2011年9月27日から7年弱入院していた。</p> <p>NA) もともと、こだわりが強く、物事に妥協できない性格だったが、歳を重ねるごとに、その思いが強くなってきたようだ。病院で統合失調症と診断された当手を振り返ってくれた</p> <p>Q&A) 統合失調症として診断された。精神障害というだけで偏見、差別があるのが現実。周囲からも、そう思われているかもしれない。人には、プラスとマイナスの面があるので、できるだけマイナスの面を表に出さずに生きていくしかない。</p>	
3	・訪問看護の様子	訪問看護サービスについて	<p>NA) 彼は週に1回、訪問看護を受けている。彼が受けている支援は薬の飲み忘れを防止するための内服管理や地域住民との対人関係の相談等がある。</p> <p>そのような支援により、現在は対人トラブルもなく、散歩をする際に近隣住民と挨拶をすることもできるようになったようだ。</p>	訪問看護…看護師等が住まいに訪問し、療養生活を送る方の看護を行うサービス
4	・自宅でのインタビュー	本人が没頭している辞書研究に関して	<p>NA) 入院前から没頭している、彼のライフワーク、「辞書研究」。彼の手記には、「入院中、これ以上辞書や本を買うなどと言われては、退院する以外には道はない」と記されている。</p> <p>入院中は、現在とは異なり、辞書研究に没頭することが難しく、退院することを待ち望んでいたことがわかる。彼にとって、それほど大切な辞書研究とは、どのようなものなのだろうか？</p> <p>Q&A) 様々な出版社の辞書を比較し、同じ項目でも異なった表現になっている言葉を調べている。</p> <p>NA) 彼がライフワークに選んだ、この辞書研究。やりがいや醍醐味について話をしてくれた</p> <p>Q&A) 住んでいる土地や、出身地についての説明が辞書に載っていることを見つけると嬉しい。自分にゆかりのある土地について、情報不足と感じる箇所があれば、その旨、出版社に伝えている。生まれ育った山形県に関しては、辞書を通じて、きち</p>	

			<p>んと情報を発信していきたい。山形を誇りに思っている新しいことを見つけるワクワク、ドキドキが、自分に対する、ご褒美</p> <p>NA)彼の手記には、辞書研究への熱意がこう記されている。</p> <p>「私自身の辞書愛が偽物でもまがい物でもない真正銘の本物であることを、人生これから30年の楽しみとしたい。これこそが原動力であり、源です。」</p>	
5	・自宅でのインタビュー	<p>自由を手にした本人が思う</p> <p>同じような境遇の方たちへの</p> <p>メッセージ</p>	<p>NA) 最後に同じように長期入院をしている方たちに対して、彼の思いを聞いてみた</p> <p>Q&A) 自由がない状況におかれている精神障害者の方たちに対して、自分の姿を見て、諦めずに前を向くようにして欲しい。</p> <p>NA) 辞書研究に没頭できる生活を思い描き、その生活を実現した彼。今後も、自身のこだわりを大切にし、自分らしく生き続ける。</p>	

(4) 導入編

①制作方法

導入編の制作では、下記ア、イを実施した。

- ア. 構成
- イ. 編集

②制作スケジュール

以下のスケジュールで、構成内容を基に計3回編集をした。

表 19 制作スケジュール (導入編)

実施事項	実施時期
構成	12月中旬～12月末
編集1回目	1月中旬
編集2回目	1月末～2月初旬
編集3回目	2月中旬～3月初旬

③構成

以下のコンテンツを盛り込み、視聴者が本編の映像内容に関する制度や社会的背景を理解できる映像となるよう構成した。

- ・長期入院している精神障害者の現状
- ・長期入院している精神障害者を取り巻く制度の変遷
- ・地域移行に対する現在の取り組み

④編集

構成内容を基に制作したたたき台映像に対し、オブザーバーと有識者から収集した以下のご意見を基に編集を行った。

表 20 編集に関するご意見 (導入編)

実施事項	主なご意見
編集1回目	<ul style="list-style-type: none">・なぜ長期入院患者が多いのかという理由を、制度・社会的背景と共に説明できるようにした方が良い。・データは最新の情報を使用し、出典を記載する。・現行サービスの詳細な説明は不要。
編集2回目	<ul style="list-style-type: none">・「精神保健福祉法」を「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」として精神障害者福祉を明確にする。・5大疾病患者数を表現するグラフを掲載した方が良い。・「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムの構築」のイメージ) 図は、絵のみでなく、説明する文言を入れて視聴者が理解しやすい図にするべき。

編集3回目	<ul style="list-style-type: none"> ・冒頭の映像の趣旨を示すテロップは、視聴に対する興味を失くしかねないため削除する。 ・特に制度や法律の解説部分について、ナレーションや表の情報量が多すぎるため、情報量を少なくする必要がある。 ・精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムのイメージ図について、住まいや医療等それぞれが繋がっているということがわかるよう、全てを円として繋げる工夫が必要。 ・現状のグラフでは、入院患者数に比べて外来患者数が非常に多いため入院患者数が少ないと視聴者に誤解されかねない。そのため、5代疾病ごとの入院患者数を比較するグラフを掲載してはどうか。 ・入院患者数の推移のグラフの後に、入院患者が高齢化していること、退院後の転機がわかるスライドを挿入してはどうか。
-------	---

5 映像に対する評価

(1) 実施概要

①評価目的

作成した映像の内容が本事業の趣旨に沿ったものになっているかを確認すること

②評価項目

評価を実施する際の視点は「映像自体の妥当性評価」及び「普及推進のあり方」の2つであり、それぞれ以下の項目について確認した。

(映像自体の妥当性に係る評価項目)

- ・ 本映像趣旨に対する合致度
- ・ 本映像内容に対する理解度

(普及推進のあり方に係る評価項目)

- ・ 他者に対する本映像の推奨意向
- ・ 想定される視聴対象者
- ・ 想定される活用目的
- ・ 想定される訴求ポイント

③調査方法

計71名に視聴いただき、上記項目に関するアンケートに回答してもらった。

(2) 評価結果

①回答者属性

回答者属性について、「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」が最も多く、全体の45.1%だった。

問1. あなたご自身のことについて、お聞かせください。(ひとつに○)

1. 精神障害をお持ちの方	2. 精神障害をお持ちの方のご家族	3. 1,2以外の支援者	4. その他	計
12	32	26	1	71
16.9%	45.1%	36.6%	1.4%	100.0%

②映像内容の合致度

本事業の趣旨と映像内容の合致度について、全体では「1. 思う(23.9%)」「2. どちらかというと思う(33.8%)」と回答した割合が57.7%であった。回答者属性別では、「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」が「3. あまり思わない(37.5%)」「4. 思わない(9.4%)」と回答した割合が46.9%であり、「1. 精神障害をお持ちの方(16.6%)」「3. 1,2以外の支援者(15.3%)」と比べ、高かった。

問2. 本映像は、「障害等にあまり接点のない一般市民が、精神障害や精神障害者の地域での生活について知ることを目的として制作しました。目的に沿う内容となっていると思いますか。(ひとつに○)

	1. 思う	2. どちらかというと思う	3. あまり思わない	4. 思わない	無回答	計
1. 精神障害をお持ちの方	3	6	1	1	1	12
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	8	8	12	3	1	32
3. 1,2以外の支援者	6	10	3	1	6	26
4. その他	0	0	0	0	1	1
計	17	24	16	5	9	71
	1. 思う	2. どちらかというと思う	3. あまり思わない	4. 思わない	無回答	計
1. 精神障害をお持ちの方	25.0%	50.0%	8.3%	8.3%	8.3%	100.0%
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	25.0%	25.0%	37.5%	9.4%	3.1%	100.0%
3. 1,2以外の支援者	23.1%	38.5%	11.5%	3.8%	23.1%	100.0%
4. その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
計	23.9%	33.8%	22.5%	7.0%	12.7%	100.0%

③本映像内容に対する理解度

本映像内容に対する理解度に関して、全体では「(2) 長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること」について、「1. よく理解できた(42.3%)」「2. まあまあ理解できた(45.1%)」とした割合が、87.4%と最も割合が高かった。一方で、「(4) 精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ」について、「1. よく理解できた(14.1%)」「2. まあまあ理解できた(42.3%)」とした割合が、56.4%と最も低かった。

問3. (1)～(6)について、映像を通してどの程度理解できたか、お聞かせください。(ひとつに○)

【全体】

	1. よく理解 できた	2. まあまあ理解 できた	3. あまり理解 できなかった	4. 理解 できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	25	30	12	2	2	71
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	30	32	8	1	0	71
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	27	31	8	4	1	71
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	10	30	23	8	0	71
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	25	24	18	2	2	71
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	28	28	11	3	1	71
	1. よく理解 できた	2. まあまあ理解 できた	3. あまり理解 できなかった	4. 理解 できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	35.2%	42.3%	16.9%	2.8%	2.8%	100.0%
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	42.3%	45.1%	11.3%	1.4%	0.0%	100.0%
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	38.0%	43.7%	11.3%	5.6%	1.4%	100.0%
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	14.1%	42.3%	32.4%	11.3%	0.0%	100.0%
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	35.2%	33.8%	25.4%	2.8%	2.8%	100.0%
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	39.4%	39.4%	15.5%	4.2%	1.4%	100.0%

「1. 精神障害をお持ちの方」では、「(2) 長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること」について、「1. よく理解できた(58.3%)」「2. まあまあ理解できた(33.3%)」とした割合が91.6%と最も高かった。一方で、「(4) 精神障害の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ」について、「1. よく理解できた(16.7%)」「2. まあまあ理解できた(25.0%)」とした割合が、41.7%と最も低かった。

1. 精神障害をお持ちの方

	1. よく理解できた	2. まあまあ理解できた	3. あまり理解できなかった	4. 理解できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	5	5	0	1	1	12
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	7	4	0	1	0	12
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	7	2	1	1	1	12
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	2	3	6	1	0	12
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	6	2	1	1	2	12
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	4	5	1	1	1	12
	1. よく理解できた	2. まあまあ理解できた	3. あまり理解できなかった	4. 理解できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	41.7%	41.7%	0.0%	8.3%	8.3%	100.0%
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	58.3%	33.3%	0.0%	8.3%	0.0%	100.0%
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	58.3%	16.7%	8.3%	8.3%	8.3%	100.0%
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	16.7%	25.0%	50.0%	8.3%	0.0%	100.0%
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	50.0%	16.7%	8.3%	8.3%	16.7%	100.0%
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	33.3%	41.7%	8.3%	8.3%	8.3%	100.0%

「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」では、「(3) 地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ」について、「1. よく理解できた(21.9%)」「2. まあまあ理解できた(59.4%)」とした割合が81.3%と最も高かった。一方で、「(4) 精神障害の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ」について、「1. よく理解できた(9.4%)」「2. まあまあ理解できた(46.9%)」とした割合が、56.3%と最も低かった。

2. 精神障害をお持ちの方のご家族

	1. よく理解 できた	2. まあまあ理解 できた	3. あまり理解 できなかった	4. 理解 できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	7	16	8	1	0	32
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	5	20	7	0	0	32
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	7	19	3	3	0	32
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	3	15	9	5	0	32
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	14	7	11	0	0	32
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	14	11	6	1	0	32
	1. よく理解 できた	2. まあまあ理解 できた	3. あまり理解 できなかった	4. 理解 できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	21.9%	50.0%	25.0%	3.1%	0.0%	100.0%
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	15.6%	62.5%	21.9%	0.0%	0.0%	100.0%
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	21.9%	59.4%	9.4%	9.4%	0.0%	100.0%
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	9.4%	46.9%	28.1%	15.6%	0.0%	100.0%
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	43.8%	21.9%	34.4%	0.0%	0.0%	100.0%
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	43.8%	34.4%	18.8%	3.1%	0.0%	100.0%

「3. 1,2以外の支援者」では、「(2) 長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること」について、「1. よく理解できた(69.2%)」「2. まあまあ理解できた(26.9%)」とした割合が96.1%と最も高かった。一方で、「(4) 精神障害の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ」について、「1. よく理解できた(19.2%)」「2. まあまあ理解できた(42.3%)」とした割合が、41.7%と最も低かった。

3. 1,2以外の支援者

	1. よく理解できた	2. まあまあ理解できた	3. あまり理解できなかった	4. 理解できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	13	9	4	0	0	26
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	18	7	1	0	0	26
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	13	10	3	0	0	26
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	5	11	8	2	0	26
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	5	15	5	1	0	26
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	10	11	4	1	0	26
	1. よく理解できた	2. まあまあ理解できた	3. あまり理解できなかった	4. 理解できなかった	無回答	計
(1)長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	50.0%	34.6%	15.4%	0.0%	0.0%	100.0%
(2)長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個々人なりの充実した生活を送っていること	69.2%	26.9%	3.8%	0.0%	0.0%	100.0%
(3)地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	50.0%	38.5%	11.5%	0.0%	0.0%	100.0%
(4)精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	19.2%	42.3%	30.8%	7.7%	0.0%	100.0%
(5)精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	19.2%	57.7%	19.2%	3.8%	0.0%	100.0%
(6)当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	38.5%	42.3%	15.4%	3.8%	0.0%	100.0%

④他者に対する本映像の推奨意向

他者に対する本映像の推奨意向について、全体では「1. 思う(43.7%)」「2. どちらかというと思う(38.0%)」と回答した割合が81.7%であった。回答者別でみると、「3. 1,2以外の支援者」が「1. 思う(53.8%)」「2. どちらかというと思う(42.3%)」と回答した割合は、「1. 精神障害をお持ちの方(83.4%)」「2. 精神障害をお持ちの方のご家族(71.9%)」に比べ、96.1%と高かった。

問4. 本映像を活用したい、又は誰かに視聴を薦めたいと思いますか。(ひとつに○)

	1. 思う	2. どちらかというと思う	3. あまり思わない	4. 思わない	無回答	計
1. 精神障害をお持ちの方	5	5	1	1	0	12
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	12	11	7	2	0	32
3. 1,2以外の支援者	14	11	1	0	0	26
4. その他	0	0	1	0	0	1
計	31	27	10	3	0	71
	1. 思う	2. どちらかというと思う	3. あまり思わない	4. 思わない	無回答	計
1. 精神障害をお持ちの方	41.7%	41.7%	8.3%	8.3%	0.0%	100.0%
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	37.5%	34.4%	21.9%	6.3%	0.0%	100.0%
3. 1,2以外の支援者	53.8%	42.3%	3.8%	0.0%	0.0%	100.0%
4. その他	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
計	43.7%	38.0%	14.1%	4.2%	0.0%	100.0%

⑤想定される視聴対象者

想定される視聴対象者について、「1. 精神障害をお持ちの方」「3. 1, 2以外の支援者」が回答した割合は「4. 福祉を学ぶ学生(1:66.7% 2:88.5%)」「1. 精神障害をお持ちの方(1:58.3% 2:73.1%)」の順に高かった。「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」に関しては、「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」と回答した割合が53.1%と最も高かった。

問5. 本映像は、どのような方に視聴いただくと良いと思いますか。(当てはまるもの全てに○)

	1. 精神障害をお持ちの方	2. 精神障害をお持ちの方のご家族	3. 1,2以外の支援者	4. 福祉を学ぶ学生	5. その他	n
1. 精神障害をお持ちの方	7	6	6	8	6	12
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	14	17	11	12	7	32
3. 1,2以外の支援者	19	16	15	23	9	26
4. その他	0	0	0	0	1	1
	1. 精神障害をお持ちの方	2. 精神障害をお持ちの方のご家族	3. 1,2以外の支援者	4. 福祉を学ぶ学生	5. その他	
1. 精神障害をお持ちの方	58.3%	50.0%	50.0%	66.7%	50.0%	
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	43.8%	53.1%	34.4%	37.5%	21.9%	
3. 1,2以外の支援者	73.1%	61.5%	57.7%	88.5%	34.6%	
4. その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	

「5. その他」では、以下のような回答があった。

- ・一般市民：7名
- ・入院中の患者（特に、体調の良い方）
- ・精神医療に関わる関係者（医師、看護師等）
- ・民生委員
- ・一般の教育機関（小中高大）の学生やその教員
- ・精神障害関連に関わる自治体の方々（保健師等） 等

⑥想定される活用目的

「1. 精神障害をお持ちの方」はいずれの活用目的においても、およそ60%台と概ね割合は変わらないが、「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」「3. 1,2以外の支援者」に関しては、「1. 入院患者が、退院後の生活に対する不安を解消するため(2: 56.3% 3: 80.8%)」を選択した割合が最も高かった。また、問5の傾向と同様に、「3. 1,2以外の支援者」が「4. 福祉を学ぶ学生が、当事者との関わり方について学ぶため」を選択した割合は76.9%と、「1. 精神障害をお持ちの方(66.7%)」「2. 精神障害をお持ちの方のご家族(37.5%)」と比べ高かった。

問6. 本映像は、どのような目的で活用されると効果的であると思いますか。(当てはまるもの全てに○)

	1. 入院患者が、退院後の生活に対する不安を解消するため	2. 患者家族が、患者の退院後の生活に対する不安を解消するため	3. 支援者が、地域生活を送る当事者に対する支援方法や工夫を学ぶため	4. 福祉を学ぶ学生が、当事者との関わり方について学ぶため	5. 障害等に接点のない方々が、当事者に対する偏見を解消するため	6. その他	n
1. 精神障害をお持ちの方	8	7	7	8	8	3	12
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	18	14	14	12	16	3	32
3. 1,2以外の支援者	21	17	10	20	16	2	26
4. その他	0	0	0	0	0	0	1
	1. 入院患者が、退院後の生活に対する不安を解消するため	2. 患者家族が、患者の退院後の生活に対する不安を解消するため	3. 支援者が、地域生活を送る当事者に対する支援方法や工夫を学ぶため	4. 福祉を学ぶ学生が、当事者との関わり方について学ぶため	5. 障害等に接点のない方々が、当事者に対する偏見を解消するため	6. その他	
1. 精神障害をお持ちの方	66.7%	58.3%	58.3%	66.7%	66.7%	25.0%	
2. 精神障害をお持ちの方のご家族	56.3%	43.8%	43.8%	37.5%	50.0%	9.4%	
3. 1,2以外の支援者	80.8%	65.4%	38.5%	76.9%	61.5%	7.7%	
4. その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	

「6. その他」では、以下のような回答があった。

- ・支援者が地域移行を進めるための研修
- ・市民講座など様々な一般市民向けの公開講座
- ・楽観的では困る、国の予算を増やし受け皿づくりを充実するために活用してほしい 等

⑦想定される訴求ポイント

「1. 精神障害をお持ちの方」「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」「3. 1, 2以外の支援者」のいずれにおいても、訴求ポイントとして「自立」「健常者と変わらない」「地域で生活する」が挙げられている。

問7. 本映像の中で、今後視聴いただく方に、特に知っていただきたい内容は何か。

「1. 精神障害をお持ちの方」

- ・ 障害者も自立したいと思っていること
- ・ 精神疾患が特例ではないこと
- ・ 精神障害者も基本的な心の動きは健常者と変わりません。やりたいことがあったり、毎日の仕事があるだけで、生き生きと生活できるんです。そのためには病気だからと病院の中にいるのではなく、社会に出てたくさんの人（はじめはよく理解してくれる支援者～後には地域、仕事で関わる方々）と関わりを持つことが必要です。退院できる人は退院した方が、病気を治すためにはいいのです。・・・ということを感じてもらいたいです。この人たちは病気が軽いから・・・、と冷めて見るのではなく、長期入院をしている人の中には、退院した方が病気が良くなる人達がいるのを知ってほしいです。
- ・ 何十年も入院していても、地域で暮らすことができるということ。また、支援体制の在り方を工夫すれば、患者が地域で暮らしていけるということ
- ・ 精神に障がいがあっても地域で自分らしく生き生きと生活している人の存在 等

「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」

- ・ 長期入院患者でも、治療次第で通院し、1人暮らしができるようになる。自立できること。
- ・ 統合失調症の当事者に悪い人はいない事（病気が悪さをしていることです）。 等

「3. 1, 2以外の支援者」

- ・ 自立するうえで多くの支援が必要であり、そのことで障害者の自立が支えられているということ
- ・ 入院生活の長期化が、いかに人の生活能力の低下と自尊心を低くさせているかということ
- ・ 長期入院は独りの人間としての生きがいを失わせる
- ・ 精神障害があっても、地域で当たり前前に暮らせること
- ・ 精神障害があっても、希望する暮らしができること
- ・ 精神障害者と言われる方たちが当たり前前に地域の一員として暮らしていること
- ・ 本人中心の支援（意思決定）の大切さ 等

⑧映像に対する意見・感想等

問8. その他、本映像に対しご意見やご感想等がございましたら、是非お聞かせください。

「1. 精神障害をお持ちの方」

(肯定的なご意見)

- ・ この映像は、たくさんの方に見てもらいたいです。長期入院している人がみんな、こういう生活ができるようになるとは言えないですけど、退院できる病状なのに退院できない人がたくさんいるのも事実です。受け皿となるご家族や、支援者のみなさんの不安を少しでも解消できるように、是非見ていただきたいと思います。
- ・ 色々な場所で、支援者、家族、本人、また福祉や医療に関わりがない方でも、精神障害者が地域で暮らすことに興味や関心がある方へ視聴して頂けるようになることで、地域で多くの患者が暮らしていけることに繋がって欲しいと思う。市民講座、フォーラム、学会、研修、授業などの教材や参考資料として使われると良いと思う。ま

た、ホームページやSNSでの配信により多くの方々へ届けて頂けることを願っています。支援者を雇用する立場の方々にも、是非ご覧いただき、支援者が増えることも期待しています。

- ・ 一般の方々が偏見を解消できる映像になっていると思いました。人々の無関心というのが一番問題かと思いません。

(改善に向けたご意見)

- ・ 統合失調症の方だけに焦点が当てられているのは良くないと思います。うつ病や双極性障害など、様々な性障害者を知ってもらうビデオが望ましいと思います。
- ・ 当事者のニーズをどう汲み取っていくか、その点で作成してほしいです。

(否定的なご意見)

- ・ 何を見せたいのか伝えたいのか意味が分からない 等

「2. 精神障害をお持ちの方のご家族」

(肯定的なご意見)

- ・ 統合失調症の発症パターンの事例がよく理解できる。
- ・ 同種の映像がないので現状で貴重だ。
- ・ 長期入院を経て社会にでてそれぞれに夢をもって生き生きと生活しておられる様子に感動した。
- ・ こんなスタイルもありだなと思いました。

(改善に向けたご意見)

- ・ 一人、二人でもいいので、初めから、いろんなことを乗り越えて(生活、通院、家族、職場、人間関係等々)、医師と、支援スタッフ、家族、友人と一緒にやってきたケース、詳細な映像が見たいです。
- ・ 日常の当事者の経済的な背景を盛り込んだ方が良い
- ・ ピアサポーターについて、利用についてもっと知りたい

(否定的なご意見)

- ・ 地域の方々には解りにくく、一般市民に誤解を招く。
- ・ 目的が、ずれた映像に思う。地域の人に理解してもらうにはほど遠い。
- ・ パートナーを見つけられる人はほんの少しだと思うの一般の精神障害者ではないと思う 等

「3. 1. 2以外の支援者」

(肯定的なご意見)

- ・ 当たり前なのが、当たり前「行えることの幸せの大切さを。当事者、家族、支援者が共に学べる素晴らしいツールだと思いました。
- ・ とても参考になりました。地域社会のうけ皿不足をよく感じました。
- ・ ほほえましい生活の様子が良くわかりました。
- ・ 地域生活を送り(ニコニコ暮らせる)社会を作りたいと改めて確認した。

(改善に向けたご意見)

- ・ 入院中の姿は一般市民はわからないので、そのあたりのボリュームがあれば、なおわかりやすいのでは。
- ・ 長期入院に偏っているので、そのあたりの説明がないと、精神障害=長期入院と誤解を生まない工夫が必要。
- ・ 5事例全てが当事者からのメッセージ中心なので、インパクトは強いが、対象者によってはニーズに合わないかもしれない。
- ・ VTR では入院生活を否定的にとらえられていたが、長期入院には否定的でも、医療は必要なので、医療には引き続きサポートを受けていること、受けられること、を示してほしい。

(否定的なご意見)

- ・ 精神障害者の実態について、誤解を生みかねない 等

6 まとめ

(1) 映像コンテンツについて

精神障害の地域移行を取り巻く関係者を中心に視聴していただいた結果、「精神障害（統合失調症）の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているか」を除き、概ね理解できる内容となっていたため、更なる映像コンテンツの改編を通じ、一般市民でも理解できるものとなると期待できる。

しかし、本映像の主人公は全て長期入院経験者であるため、「精神障害＝長期入院」という誤解が生じるという意見もあった。実際には、精神医療は着実に発展しており、入院患者数も減少しているため、そのような誤解をうむことのないよう、動画掲載先に説明文を掲載するなど、留意されたい。

(2) 映像の普及について

精神障害者の地域移行に関係する関係者に対しては、障害者関連のイベント、精神障害福祉関連の研修の場等）を通じて継続的に普及啓発を行うことが必要である。

支援者からの評価結果を踏まえると、映像内容は障害に接点のない一般市民でも理解できる平易な内容となっているため、福祉教育の場を通じて福祉の学生に対して普及することも有効である。

更に、本映像は、最終的に一般市民でもアクセスすることのできる「厚生労働省動画チャンネル(youtube)」へアップロードすることを予定しているが、伝える内容についての齟齬や誤解、映像出演者に対するプライバシー等いくつか指摘されている点もあるため、留意されたい。

～当事者委員より、本事業を通したご感想～

・委員会に参加して、精神障害者が地域に出ていく困難さを感じたと共に、地域で暮らす方々が多くいることもわかりました。特に北海道砂川市の方で、30年の入院生活後に地域で暮らす方のビデオでは、感動しました。人生の多くを精神科病棟で暮らした彼が今後は、地域で支援を受けながらも伸び伸びと暮らしていけることを切に願います。また、自身も行っているピアサポーターも取り上げられている場面のチャプターもありましたので、ピアサポーターへの関心も広がると良いと思います。また、全国には、多くの方々が地域で暮らしている例をあげることも、今後の長期入院から退院した方に希望を与えることと思いました。

・大変勉強になりました。会議でも興味深いご意見がたくさん出ましたし、当事者委員の方々の視点が、自分とはまた違うもので、はっとさせられる場面もたくさんありました。自分の経験でしか長期入院と退院後の生活を捉えられていなかったのが、他の方々の映像を見ることで、視野を大きく持つことができるようになりました。ピアサポートの活動に関しても、たくさん取り上げて説明していただいたことで、理解が深まると思います。支援の形や目的を知らないことで、患者さんが孤立したり、引きこもることが減るといいなと思います。

・地域移行支援では、医療サイドと地域の福祉サイドの連携が相まって初めてうまくいくものだと思う。人間は環境に大きく影響を受ける動物であるので、殊、長期入院環境から地域生活環境への大きな環境変化のある中で、すでに地域での生活が軌道に乗っているピアサポーターの本人へのかかわりは、ある意味、一つの模範となり有効であると感じた。また、社会的入院は、社会の問題の一つという観点から、国民の精神に障がいがある人、ひいては、障がいのある人に対する協力的支援の態度への意識改革及び国民風土の醸成に関する国家的取り組みの必要性を切に感じた。更に、現在用意されている障害福祉サービスは決して十分なものではなく、まだまだきめ細やかなニーズに適合したサービス体系が準備されることが望まれると感じた。そうした中で、精神に障がいのある人がリカバリー志向に基づき、再チャレンジ可能な社会へと変貌を遂げていくことを希望するに至った。そして今回、委員として貴重な機会をいただけたことは誠に幸甚であり、今後もあらゆる機会をとらえて、精神に障がいがある人の更なる社会参画を助長していくために、微力ながら力を尽くしていきたいと感じた。

参考資料1 ドキュメンタリー映像制作委員会議事概要

会議名	第1回「当事者・家族等による、精神障害者に対する理解促進等に資する普及啓発方法の開発」ドキュメンタリー映像制作委員会		
開催日	平成30年9月9日(日)	開催時間	15:00~16:30
開催場所	PwCコンサルティング合同会社大手町オフィス OTEMON 会議室		
出席者	委員：岡本委員、大喜田委員、柳委員、吉川委員、田村委員 厚生労働省：小河原様、稲葉様 PwC事務局：東海林、木本		
配布資料(投影資料)	I. 投影資料1 既存映像 II. 資料1 全体説明資料		
受領資料	なし		

議題/検討結果	
#	内容
1	映像構成について →委員の指摘と今後決定する出演者の個別性を踏まえた上で、映像構成を検討し撮影に入る
2	映像出演者について →事務局で引き続き映像出演者の候補者を募り、後日委員に確認いただき出演者を決定する

議事内容

1. 映像構成について

＜投影資料1を視聴：本映像制作に関して、どのような情報を映像に盛り込むべきか議論＞

- 理解促進のために盛り込むべき情報：精神障害者は危険ではないということ、地域で共に生活している様々な方（支援者、家族、事業所の仲間、他地域住民等）と関わりながら生活をしているということ
- 理解促進のために盛り込むべき情報の表現方法：精神障害者がイキイキと楽しんでいる場面を映す、当事者だけでなく周囲の関係者も交えて映す、地域で共に生活している様々な方へのインタビューを実施する
- 盛り込むべき補足情報：出演者が現在の生活に至るまでの背景（地域移行支援を開始したきっかけ等）、地域移行支援に関する社会資源（フォーマルとインフォーマル両方）、統合失調症という疾患自体の情報、地域移行支援の歴史
- 補足情報の表現方法：支援者（主治医や精神保健福祉士等）へのインタビュー、疾患の症状等を表す漫画、パンフレット

＜事務局より、資料1を使用し説明：長期入院から地域へ移行した委員の実際のご経験、また支援者として関わった際のご経験の共有＞

- 退院しようと思ったきっかけ：外部から来た作業療法士の方に声を掛けてもらったこと、自分から退院希望を病院スタッフに発信していた、共に入院していた患者の方が退院したこと、地域で生活をしているピアサポーターの話やイキイキした様子を見たこと
- 入院中の退院への思い：大多数の入院患者は入院生活が一番良いと思っている方が多いが、退院後は、入院生活には戻りたくないと言う方が多い
- 退院までの支援：グループホームでの試験外泊、1人での外出

- ・ 退院が決定してから退院までの気持ちの変化：最初は不安だったが、話が具体的になってきてからはワクワク感の方が大きかった
- ・ 体調不良時の対応：グループホームにいる世話人や事業所の方が対応してくれるため安心。家族も安心している。
- ・ 地域での生活を継続するための必要なこと：退院後の生活の青写真を描けていることが大切、生活への不安がある中で安心できる場があるということが大きな支えになるため所属感を得ることが必要

→委員からのご助言等を踏まえ、映像構成を検討

2. 映像出演者の検討

<事務局より、資料1を使用し説明>

- ・ 現在集まっている候補者は計6名、該当チャプターにバラツキもあるため、引き続き候補者を募集する必要がある

→事務局により、引き続き候補者を募集し、後日委員に確認いただき出演者を決定する

今後の作業

- ・ 映像出演者の決定→引き続き候補者を募集し、委員確認の上9月10日の週で決定する
- ・ 出演者に対する事前取材→9月中に実施し、その後撮影に入る

会議名	第2回「当事者・家族等による、精神障害者に対する理解促進等に資する普及啓発方法の開発」ドキュメンタリー映像制作委員会		
開催日	平成30年11月5日(月)	開催時間	14:00~16:00
開催場所	PwCコンサルティング合同会社大手町オフィス HANZO MON 会議室		
出席者	委員：岡本委員、大喜田委員、柳委員、田村委員 厚生労働省：小河原様、吉野様、稲葉様 PwC事務局：東海林、木本		
配布資料(投影資料)	III. 資料1 全体説明資料 IV. 投影資料1 編集映像 V. 参考資料1 映像構成案(詳細) VI. 参考資料2 出演者情報一覧 VII. 参考資料3 映像構成案一覧 VIII. 参考資料4 事前取材録		
受領資料	なし		

議題/検討結果	
#	内容
1	進捗共有 →進捗状況と今後のスケジュールについて委員に了承いただいた。引き続き、チャプターごとに並行して作業(事前取材、撮影、編集)を進める。
2	チャプター1 編集映像の内容に係る検討 →編集映像に対する委員からの指摘を踏まえた上で再編集を行い、次回の委員会で編集映像に対し再度意見をいただく。
3	チャプター2~4 映像内容の編集方針に係る検討 →映像構成案に対する委員の指摘を踏まえた上で撮影・編集を行い、次回委員会で編集映像に対し意見をいただく。

議事内容

1. 進捗共有について

<事務局より、資料1「1. 進捗共有」を使用し説明をした。>

- ・ 進捗状況と今後のスケジュールについて特に異議なく、委員より了承いただいた。

→引き続き、チャプターごとに並行して作業を進める。

2. チャプター1 編集映像の内容に係る検討

<事務局より、資料1「2.チャプター1 編集映像についての検討」と参考資料1を用いて説明した上で編集映像を視聴いただき、以下の通り意見交換を行った。>

- ・ インタビュー場面が多いため、日常生活の場面を映し出した方が良い。そのために、1日の生活スケジュールをイラストで掲載し、時間軸で生活のシーンを整理するという方法もある。
- ・ 辞書研究をすることになった背景や目的がないため、特異な人という印象を持たれてしまう懸

念がある。また単純に、なぜ辞書研究をしているのか気になるため、辞書研究をしている背景や目的を情報として入れるべき。

- ・ “次なるステージを目指す希望”が現時点でのコンセプトに含まれているが、実際はようやく退院できた喜びが非常に大きいという印象を受けた。そのため、コンセプトとしては今後の希望ではなく、退院できた達成感や喜びに焦点を当ててはどうか。
- ・ 現在の生活に対する喜びに焦点を当てるのであれば、退院前と現在の生活のギャップを示すことで、より一層“喜び”が協調されるのではないか。特に主人公の表情から喜びが伝わりにくい分、ナレーション等で補足をするとうい。例えば、いつ発症をしてどのような症状があり、家族の負担もあって入院をしたが、紆余曲折ありこのような方法でようやく退院できたというような、病気を抱えながら大変な20年を送ったという基本的な経過を伝えられれば良い。
- ・ 長期入院をしていたことがわからないほど、日常生活をそつなくこなすことができている。そのため、視聴者になぜこの主人公が入院をしていたのかという疑問を持ってもらうためにも、7年間の入院期間と退院直後であるということを情報として出すべきではないか。
- ・ 主人公が社会的入院という発言をしているが、どのような意図でその用語を使用したか把握し、解説を入れるべき。最近では社会的入院という用語は使用しなくなったため、その言葉の解説は必要である。
- ・ 主人公がどのような社会資源を活用しているのかということを経ノグラムやエコマップで示すのはどうか。
- ・ 訪問看護について、基本的に地域で生活をしている精神障害者のバイタルサインを測定することは稀である。退院直後であり関係構築のために実施しているのだろうが、一般的でないため別のシーンを映し出した方がよい。

3. 映像出演者の検討

<事務局より、資料1「3.チャプター2~4の映像内容についての検討」と参考資料1を用いて説明をし、以下の通り意見交換を行った。>

【全体について】

- ・ 基本情報、現在に至るまでの背景、現在の生活という流れで映し出す。特に生活の場面をクローズアップするような映像とする。
- ・ ナレーションやテロップの解説で使用する言葉、特に制度やサービスの用語に関しては、正確な用語を使用する。
- ・ 場面に合わせた音楽を入れた方がよいのではないか。

【チャプター2について】

- ・ 入院中にピアサポーターと出会ったときの感情や、自身がピアサポーターとして活動をしようと思った理由を取材してほしい。
- ・ 自分の病気を理解して現在の生活を送っている方であるため、主人公に病気について詳しく語ってもらい、このチャプターで統合失調症についての解説を入れてはどうか。

【チャプター3について】

- ・ 金銭管理のサポートを受けているようだが、入院中の金銭管理はどのようにしていたか情報として聞いてほしい。
- ・ 30年も入院をしていて、なぜようやく退院をすることができたのか経緯を伝えられるように

する。

- ・ 作業所は正式名称ではないため、正式名称を使用する。

【CHAPTER 4について】

- ・ 精神障害者同士の恋人関係に消極的な反応を示す方もいると思うが、お互いに支え合う良好な関係を保つことができているため恋人関係については映し出して良いと思う。

今後の作業

- (ア) CHAPTER 1の映像編集→委員の意見を踏まえ再編集を行い、次回委員会で再度意見をいただく。
- (イ) CHAPTER 2～4の撮影・編集→委員の意見を踏まえ 11 月中に撮影を終了し、次回委員会で編集映像に対して意見をいただく。
- (ウ) 残りのCHAPTERへの出演候補者選定→11 月中には出演者を決定し、12 月初旬を目途に撮影ができるように調整をする。
- (エ) 次回委員会の日程調整→次回委員会を1月中旬に実施することができるよう、調整をする。

会議名	第3回「当事者・家族等による、精神障害者に対する理解促進等に資する普及啓発方法の開発」ドキュメンタリー映像制作委員会		
開催日	平成31年1月21日(月)	開催時間	12:30~14:30
開催場所	PwCコンサルティング合同会社大手町オフィス HANZO MON 会議室		
出席者	委員：岡本委員、大喜田委員、藤城委員、田村委員 厚生労働省：小河原様 PwC事務局：東海林、木本		
配布資料(投影資料)	IX. 資料1 映像概要資料 X. 資料2 映像構成資料 XI. 投影資料1 たたき台映像 XII. 参考資料 解説編イメージ資料		
受領資料	なし		

議題/検討結果	
#	内容
1	進捗共有 →映像の制作方針、進捗状況及び今後のスケジュールについて委員に了承いただいた。引き続き完成に向けて編集作業を進める。
2	たたき台映像の編集方針について →2月初旬までに、委員のご意見を踏まえ再編集を行う。それに対して再度ご意見を頂き、最終編集に入る。

議事内容

1. 進捗共有

<事務局より、資料1「映像概要資料」を使用し説明をした。>

- 映像の制作方針、進捗状況及び今後のスケジュールについて特に異議なく、委員より了承いただいた。

→引き続き、完成に向けて編集作業を進める。

2. たたき台映像の編集方針について

<たたき台映像を視聴いただき、資料2「映像構成資料」を用いながら、以下の通り意見交換を行った。>

【CHAPTER 1】

- コンセプト通り、長期入院を経て現在が充実しているということが表現できている。
- 支援者へのインタビューも充実しており、映像時間もちょうど良い。
- 「取り戻した笑顔」という題名についても、コンセプトに沿っており、かつ笑顔が印象的であるため良い。

【CHAPTER 2】

- ・ 出演者が語っている部分が長く、また映像に動きが少ないため、視聴者が飽きやすい映像になっている。具体的には、病状についての説明や現在のピアサポート活動の説明をしている部分の時間を短縮する工夫が必要。
- ・ 「自分と向き合う勇気」という題名については、仲間という意味合いを入れた方が良い。そのため「自分と向き合う、仲間と向き合う」という題名に変更してはどうか。

【CHAPTER 3】

- ・ パートナーと支え合っていることがコンセプトの1つであるため、現在のパートナーとの関わりを映し出せたら良い。
- ・ 前半部分の現在に至るまでの経緯を説明する部分については、簡略化してコンパクトにまとめた方が良い。
- ・ 「支え合う幸せ」という題名については、パートナーとの関わりを映像として映し出すことができれば、適した題名となる。

【CHAPTER 4】

- ・ 出演者の立場として、伝えたいことは伝わっている内容となっていた。
- ・ 精神疾患を抱えながらも、素敵な才能を活かしている人がいると思える素敵な映像になっている。
- ・ 視聴者は、統合失調症から発達障害に診断が変わった理由が気になるのではないかと。そのため、セカンドオピニオンを受けて発達障害と診断されていたが、中々診断が変わらなかったというような経緯を入れた方が良い。
- ・ 「描き続ける夢」という題名に関しては、コンセプトに沿った題名となっている。

【CHAPTER 5】

- ・ 辞書研究の内容に関する説明は、簡略化して良い。例えば、「麦飯」と「無熱」という言葉の説明をどちらか1つにするというような工夫をしてはどうか。
- ・ 辞書研究というライフワークを持っていることは、素敵なことだと思う。そのライフワークの充足が、現在の安定した生活に繋がっているため、入院中にはライフワークに没頭することができなかったという点を映し出せたら良い。
- ・ 希望を持っているというよりも、現在の生活が充実している方であるため、「希望」という言葉が入っている題名（「こだわりが教えてくれた希望」）は変更した方が良い。例えば、「私のライフワーク」や「取り戻したライフワーク」にしてはどうか。
- ・ 全体を通して言えることであるが、題名に副題を付けてはどうか。題名だけではコンセプト全てを理解しにくいと、例えばCHAPTER 5では辞書研究のことがわかるような内容を副題に付ける等して、視聴者が視聴内容を初めに分かりやすい工夫をすれば良い。

3. 委員会全体を通して

- ・ 病気のことを考える良い機会となった。非常に勉強になったと思う。
- ・ 映像に対して、自身の意見や考えを言うことができ良かった。様々な支援者等が集まるケアカフェというイベント等で、映像を活用できたら良い。また、自身が登壇する講演会でも映像を活用できたら良いと思う。

- ・ 制作した映像が、様々な人に力を与えるものになれば良い。
- ・ 一般の方々にとってはささやかな幸せを、なぜ出演者達は大きな幸せとして捉えているのかということがわかるような映像になれば良い。障害を持っている人はささやかな幸せしか享受できない、統合失調症は長期入院が必要なほど重篤な病気等、視聴者に誤解を与えることのない映像に仕上げしてほしい。

今後の作業

- (ア) たたき台映像の編集→2月初旬までに、委員のご意見を踏まえ再編集を行う。それに対して再度ご意見を頂き、最終編集に入る。

参考資料 2 事前取材録

該当チャプター	チャプター 1	取材日	2018/11/26
年齢	50 代	取材場所	ご自宅
性別	女性	居住地域	東京都
住まい	グループホームグループホーム	現在の活動	就労継続支援 B 型事業所で活動
入院期間	最長約 3 年間	退院時期	2015 年頃
利用しているサービス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 計画相談支援 ・ 共同生活援助 ・ 就労継続支援 B 型 		
現在までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就職によるストレスを機に、約 25 年前に発症 ・ 以降、3 ヶ月以上の入院を複数回繰り返す ・ 約 3 年前に退院 ・ 退院後より、就労継続支援 B 型事業所への通所を開始し漫画制作に励む 		

1. 入院から退院まで

① 入院中の退院への想いとその理由

閉鎖病棟に入院しており外出も自由にすることができなかつたため、早く退院したいと思っていた。

② 退院が決まった経緯

作業療法をしている際、地域移行推進員に「なんで入院しているの？退院はしないの？」と声を掛けられた時に自身の退院の意思を伝えたことをきっかけに、退院の話が進んだ。

③ 退院が決まってからの気持ち

これからの生活に対する不安もあったが、嬉しさの方が大きかった。

④ 退院が決まってからの支援

1 人での外出や試験外泊等、退院後の生活に慣れるための支援が様々あった。受け入れ先としては、漫画制作をしたいという自身の嗜好にあった就労継続支援 B 型事業所があったため、事業所への交通の便を考慮しグループホームを決めた。

2. 退院後から現在について

① 1日の生活について

時間	内容	場所	備考
6:00	起床	グループホーム	
7:00	朝食	グループホーム	世話人が作った朝食を入居者と共に食べる
9:00	就労継続支援B型事業所へ通所		バスと電車を乗り継ぎ1時間
10:00	就労継続支援B型事業所で作業をする ・PCで漫画制作作業	就労継続支援B型事業所	
15:00	作業終了	就労継続支援B型事業所	
16:00	就労継続支援B型事業所より帰宅	グループホーム	バスと電車を乗り継ぎ1時間
18:30	夕食	グループホーム	
22:30	就寝	グループホーム	

② 就労継続支援B型事業所での活動について

事業所全体としては、中古パソコンの修理・販売と音楽やイラスト等の芸術作品の販売を行っている。担当業務は漫画やイラスト作品の制作であり、自身で制作した作品はイベント等で販売している。退院後は週4回通所していたが、通所に往復約2時間かかることで体調を崩したことをきっかけに、現在は週1回通所している。

③ 漫画制作について

物心ついた頃から手塚治虫の漫画が好きで、自身で漫画制作をしていた。大学卒業後に漫画で賞をとったことをきっかけに漫画家を目指して上京し、漫画家のアシスタントをしながらプロの漫画家を目指していた。しかし発症をしてから、内服薬の影響等もあり漫画制作に集中できなくなり、漫画家になる夢は諦めて入院中はイラストばかりを描いていた。しかし最後の退院後、自身に合った内服調整ができ再び漫画制作を始めた。漫画の種類は、ファンタジー系等明るい漫画を制作している。

④ 今後どのような生活をしたいか、今後の目標

1人立ちをしたい。在宅でできる漫画家のアシスタントをして、いつかは単身生活をしたい。

該当チャプター	チャプター2	取材日	2018/10/03
年齢	40代	取材場所	地域生活支援センターぽぽろ
性別	男性	居住地域	北海道砂川市
住まい	グループホーム	現在の活動	ピアサポーターとして活動
入院期間	約1年間	退院時期	2013年頃
利用しているサービス	<ul style="list-style-type: none"> ・計画相談支援 ・共同生活援助 ・地域活動支援センター 		
現在までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・内服の自己中断で体調不良となり、数か月単位の入退院を3.4回繰り返していた ・最後の入院は約5年前で、入院期間は1年間 ・約1か月前まで一般就労をしていたが、体調を崩して退職し、次回就労に向け体調を整えている 		

1. 入院から退院まで

① 退院が決まった経緯

いつか退院はできると思っており、入院して1年弱が経過した頃に担当医より退院許可が出た。それをきっかけに退院の話が進んだ。

② 退院が決まってからの支援

看護師に、退院後の生活の場（グループホーム）や活用できる施設やサービス（現在通っている地域生活支援センターぽぽろや地域活動支援センター）のことを教えてもらった。グループホームへの入居を決めてから、体験外泊もした。

③ 退院後の生活で不安に感じていたこと

単身生活をするのが不安だった。その理由は、これまで内服の自己中断で入退院を繰り返していたので、内服管理ができるかどうかということが不安だったため。また、前回の退院時に料理をすることが面倒になったこともあったため、料理を続けられるか不安だった。そのため、グループホームへの入所を決めた。現在、夕食はグループホームの世話人が作ってくれ、昼食は自分で買って地域活動支援センターで食べることができるので困っていない。内服管理は今のところ自分でできているが、まだ不安がある。

2. 退院後から現在について

① 1日の生活について

時間	内容	場所	備考
7:00	起床	グループホーム	
8:00	自由時間（散歩等）	地域活動支援センター 周辺	
9:30	地域活動支援センターで過ごす ・将棋 ・利用者と談話 ・昼食	地域活動支援センター	適宜ピアサポート活動（同行支援等）が入る日もあり
14:30	帰宅 ・TV視聴 等	グループホーム	
18:00	夕食	グループホーム	
21:00	就寝	グループホーム	

② 病気の受容について

これまで、内服薬の自己中断をして体調を崩し、失職したり入退院を繰り返したりしていた。中断をしていた理由は病気を受け入れることができていなかったからだ、今になって思う。病気になり始めの頃は、自分は病気じゃないと思っており、すぐに治ると思っていた。だからこそ、内服し続けなければいけないということを理解できなかった。しかし、最後の退院をしてから地域生活支援センターのスタッフの方や地域活動支援センターの利用者の話を聞き、この病気はすぐには治らないこと、内服は続けないといけないことを理解することができた。また、「当事者研究」をしたことも病気の受容に効果的だった。

※当事者研究…当事者が自己病名をつけて、自分の抱えている問題を自分で考えるアプローチ

③ ピアサポーターとしての活動について

主に2つの活動がある。1つは、地域生活支援センターのピアサポーターとして、主に退院を希望してサポートが必要な人に対し、同行支援等のサポートをすること。もう1つは、ピアサポーター同士で結成した「ピアサポートセンターてくてく」での活動である。この活動は病気や障害を持っている人たちのみで、交流をしたり、イベント企画等を行っている。好評だったイベントは、「**秘**話会」である。この会は、「当事者同士で本当に他愛もない雑談ができる機会を作りたい」ということで、親にも支援者にも言わないことを約束に話をする当事者のみが集まる会であり、3度開催し大盛況だった。

④ ピアサポーターとして心掛けていることややりがい

積極的に関係構築をしようとするのではなく、当事者の“隣にいる”というスタンスでいる。隣にいる中で、当事者から発せられた意思に沿って物事を進めていく。実際にサポートをした方が元気になり、ハツラツと退院していく姿をみると、ピアサポート活動のやりがいを感じる。

- ⑤ 今後どのような生活をしたいか、今後の目標
仕事を辞めたばかりなので、体調を整えて仕事をしたい。また内服管理についてまだ不安があるため、単身生活をしたいという希望はない。単身生活をするには、親戚を説得する必要があるため難しい。

3. 支援者からの話

- ① 本人のこれまでの経緯について
華々しく病状が悪くなる方。被害妄想が強く、誰かの指示で、自分は死ななければならないと思込み、割腹自殺未遂をしたこともある。現在はとても落ち着いているが、環境の変化にはストレスをためやすい傾向がある
- ② ピアサポーターについて
北海道の事業として、ピアサポーターを養成している。ピアサポーターは支援をするというよりは、仲間同士の相互の助け合いである。一歩先に退院した人が、今入院している人の応援団として関わってほしいということが目的。ピアサポーターに求めていることは2つある。1つ目は、退院した人はこんな生活をしているというモデルになること、もう1つは、あくまで当事者同士の仲間として助け合うということ。ピアサポーターが指導的な姿勢を持ち、1人歩きをしてはいけないと思っている。

該当チャプター	チャプター 3	取材日	2018/10/03
年齢	50代	取材場所	地域生活支援センターぽぽろ
性別	男性	居住地域	北海道砂川市
住まい	グループホーム	現在の活動	生活訓練事業所で活動
入院期間	約 30 年間	退院時期	2017 年 12 月頃
利用しているサービス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 計画相談支援 ・ 共同生活援助 ・ 自立訓練（生活訓練） ・ 地域活動支援センター ・ 日常生活自立支援事業 		
現在までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ 約 30 年間の入院期間を経て、地域移行支援を活用し昨年 12 月に退院 ・ 退院から約 10 か月経過しているが、現時点では大きな問題なく生活をしている 		

1. 入院から退院まで

① 入院中の退院への想いとその理由

入院中は・規則が厳しかったり、よく怒られていたりして地獄のような生活だった。ずっと退院をしたいと思っていた。

② 退院が決まってからの気持ち

やっと社会に出られるかと思うと嬉しかった。退院後の生活のためにお金を貯金し、その貯金でカーペットやベッド等必要物品を買い揃えた。

③ 退院が決まってからの支援

バスの乗り方や自動販売機の使い方等を教えてもらった。

2. 退院後から現在について

① 1日の生活について

時間	内容	場所	備考
7:00	起床	グループホーム	
8:15	送迎バスが迎えに来る	グループホーム	
8:20	事業所に到着	生活訓練事業所	
9:00	<ul style="list-style-type: none"> ・ こんだて表を裁断する ・ トイレや部屋等の共用部分を掃除する 	生活訓練事業所	
13:00	作業所内のカフェでコーヒーを飲む	生活訓練事業所	
13:30	帰宅し、地域活動支援センターで過ごす	地域活動支援センター	バスで帰宅
15:30	グループホームに帰宅。夕食、入浴、自由時間	グループホーム	
22:00	就寝	グループホーム	

② 退院をして良かったこと

自分のお金で自由に外に出ておいしい食べ物を食べに行くことができるなど、自由に過ごせることが良い。あとは、入院中とは違い怒られないことが良い。今はすごくエンジョイしている。自由に自分の好きな食べ物を食べたり、レンタルビデオ屋さんに行って AKB や薬師丸ひろ子等好きなアイドルの DVD を視聴したりすることが楽しい。

③ 退院後、大変なこと等を誰に支えてもらいながらどう乗り越えたか

お金の管理が大変だった。社協の職員が手伝ってくれた。入院中からお世話になっているピアサポーターには一番支えてもらっている。何より、ピアサポーターが何気ないことを普通にはなしてくれたことが嬉しかった。

地域生活支援センタースタッフやグループホームの管理者は、入院中は体調確認や気持ちの変動や体重の増加等に気を遣ってくれていた。今は困った時に相談できる人。普段は黙っていて怒ることはしないが、間違っただけをすると叱ってくれる。

④ 現在一番支えとなっているピアサポーターと他支援者との違い

基本的なところが違う。看護師は命令的な口調で話しているように聞こえるけど、ピアサポーターは「いつも味方です。私で良ければ力になります。退院したら嫌なことがあるかもしれないけど頑張ろう。」と言ってくれる。

⑤ 今後の希望や目標

現在は事業所に週に 4 回午前中のみ通所している。今後徐々に時間を増やして工賃を貯め、喫茶店でケーキやパフェやプリンを食べたい。

4. グループホームグループホームでの生活について

① グループホームグループホームに入居した理由

料理ができなかったことと、お金の管理が心配だったということもあり、単身生活ではなくグループホームグループホームに入居した。

② グループホームグループホームで生活して良かったこと

短気で荒っぽい性格のため、お米のとぎ方も乱暴だったが、最近は気持ちも落ち着き、きちんと研げるようになったこと。

③ 入居者とどのようなことを協力しながら生活をしているか

自分はガスの使用は禁止されているため、他の入居者が卵を焼いてくれたりする。後は、他の入居者が朝起こしにきてくれる。その代わりに、食器洗いをしたりゴミ捨てをしたりしている。やってあげると喜んでくれるからやっている。

④ 体調が悪い等の緊急時はどうしているか

まずは地域生活支援センターのスタッフに相談する。スタッフは内容により、グループホーム

の管理者や病院に連絡をしている

4. 支援者からの話

① 退院をしたきっかけ

退院請求が何度も来ていた。病院側としては「この方が退院できたら誰でも退院できる」と言われるような方だった。しかし退院させてみなければわからないということで、地域移行支援を使って退院の話を進めることになった。今は特段大きな問題なく過ごすことができています。

② 生活を送る上での本人の問題

金銭管理ができない。1週間で使う8000円を一度に渡した際に、そのお金を3日間で食費すべてに費やしてしまったことがあった。本人が反省し、今後は1日に使うお金を毎日もらうことにすると提案をしてきたため現在はそのようにしている。

該当チャプター	チャプター4	取材日	2018/09/27
年齢	50代	取材場所	ご本人様のご自宅
性別	女性	居住地域	静岡県富士市
住まい	単身	現在の活動	就労継続支援B型事業所で活動
入院期間	約14年間	退院時期	2014年頃
利用しているサービス	<ul style="list-style-type: none"> ・計画相談支援 ・就労継続支援B型 		
現在までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・4年前に退院 ・デイケアに1年通い、就労継続支援B型事業所は約3年前より通所を始めた 		

1. 入院から退院まで

① 入院中の退院への想いとその理由

入院生活は安心感があったが、ずっと退院をしたいと思っていた。退院したいという気持ちから、14年間毎晩病室で泣いていた。

② 退院したいと思ったきっかけ

ずっと退院したいとは思っていたが、声を出していなかった。病院の掲示板に張られているポスター（精神保健福祉センターに関するポスター）に電話すれば退院できると、入院仲間に言われて電話をしたことがきっかけ。主治医が変わり、退院しないかと言われ退院の話が進んだ。

③ 退院が決まってからの支援

お金の管理やバスの使い方、買い物の仕方等生活を送る上での基本的なことを身に着ける訓練をした。また、デイケアには入院中から通い始めた。退院後の生活を送るまで、徐々にステップを踏んでいった。

2. 退院後から現在について

① 1日の生活について

時間	内容	場所	備考
5:00	起床	自宅	
5:30	身支度	自宅	
7:00	自宅を出る	自宅	
7:20	自宅の最寄り駅に到着	自宅の最寄り駅	
7:30	就労継続支援B型事業所の最寄り駅に到着	就労継続支援B型事業所の最寄り駅	
7:45	就労継続支援B型事業所に到着 ・更衣 ・漢字の練習	就労継続支援B型事業所	

8:45	・朝礼 ・ラジオ体操	就労継続支援 B 型事業所	
9:30	農場到着	農場	
12:00	お昼休憩	農場	
12:50	作業再開	農場	
15:00	作業終了	農場	
15:30	就労継続支援 B 型事業所に戻る ・本日の振り返り	就労継続支援 B 型事業所	振り返り内容（感想、反省点、明日の目標、今後意識して取り組むこと等）
16:25	帰宅	自宅	
20:00	就寝	自宅	

② 退院をして良かったと思うこと

退院後は寂しくて首を絞めたくなるような時もあった。しかし、仕事を通して自分の必要性を感じることができたこと、また何より彼と出会えたことが良かった。

3. 就労継続支援 B 型事業所での活動について

① 就労継続支援 B 型事業所でどのような活動をしているか

主に農作業をしている。女性はあまり農作業をしないが、体力があるため農作業をしている。気温が 37 度の時も、命がけでやっていた。

② 就労機会を得ようと思った理由は何か

現実的なことを言えば、貯金がなくなったから。しかし、お金を稼ぎたいという理由よりも、ずっと社会貢献をしたいという思いがあったということも大きな理由。また事業所の説明会で、現在の恋人の活動紹介があった。その際に、彼の生きざまに感動し、カッコいいと思いつくことへの憧れを抱いた。

③ 就労継続支援 B 型事業所で活動をする上で大変だったことと、それをどのように乗り越えたか

人間関係が大変だった。精神障害以外の障害を持つ方も一緒に働いているが、知的障害者の同僚に「精神障害者なんて…私は薬を飲んでいないからまし」と言われたり、男性にぶつかられたりした。事業所で問題があれば、事業所のスタッフに相談するようにと恋人に言われていたのでスタッフに相談した。本当は良い人であることや、ぶつかることは本人の癖であること等を教えてもらったため、今ではその同僚と良い関係を築けている。昔は、ある 1 つのことで人を判断してしまうことがあったが、今は話し合うようにしている。

④ 就労機会を得て良かったこと
自分の必要性を感じたり、スタッフに「頼むね!」と言われることで頼りにされていると感じたりすることができていること。入院中は施されてばかりなので、そのような感覚は味わえない。だから命懸けで仕事をする事ができている。

⑤ 今後どのようにになりたいか
仕事はこのまま続けたい。また、自分が頑張ることで他の人を元気にしたい。パラリンピックに出た、スノーボーダーの成田緑夢のようになることが目標。

4. パートナーとの関係について

① パートナーと現在の関係になるまでの経緯

デイケアで出会った。当初は母親や医療スタッフから付き合いを反対されていたため、パートナーが周囲に相談をしながら様々な順序（文通→電話番号の交換→公衆電話でのやり取り→携帯電話でのやり取り）を経て、周囲に認められる形で付き合いを始めた。現在も、就労継続支援B型事業所での活動等、やるべきことをきちんとやることで、パートナーとの関係を周囲に応援してもらっている。

② パートナーがいることで、自身のプラスに働いていること

パートナーができる前はよく寂しい気持ちになることが多かったが、パートナーができ愛されているという感覚を感じることができるようになり、安心感を持って生活をする事ができている。

また、事業所や病院で問題が起こった時にパートナーがアドバイスをしてくれるため、徐々に自身で問題を解決できるようになった。例えば、問題が起こった時は、どの支援者にどのように相談をすれば良いかという、相談の窓口をパートナーがアドバイスしてくれる。

③ パートナーがいることで、自身が変わったこと

パートナーが、自分のやりたいことを最優先にして行動してくれることや、とにかく自分を大事にしてくれることで、女性としての自信が付いた。また、自分のためだけに頑張るには限界があるため、パートナーがいることで苦しい時でも頑張れるようになった。

該当チャプター	チャプター5	取材日	2018/09/25
年齢	60代	取材場所	ご本人様のご自宅
性別	男性	居住地域	山形県天童市
住まい	単身	現在の活動	自宅にて辞書研究
入院期間	約7年間	退院時期	2018年9月初旬頃
利用しているサービス	・訪問看護		
現在までの経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・平成23年に措置入院 ・家族からの反対や本人のグループホーム入居への拒否等があり、退院の話が進まなかった ・保証人不要でアパートに入居できることになり、約7年間の入院経験を経て退院し、現在の単身生活に至る 		

1. 入院から退院まで

① 入院中の退院への想いとその理由

好きな時間に読書をすることも、テレビを見ることも、手紙を書くこともできなかった。また周囲の邪魔が入るため、辞書研究に没頭できる環境ではなかった。自分の好きなように好きなことをする自由な時間がなかったため、入院してからずっと退院をしたいと思っていた。私は自傷も他害もする人間ではなかったのに、父や医者にそそのかされて措置入院をした。その先は、私の入院はいわゆる社会的入院だったと思っている。自由な生活ができないということも退院したかった理由だが、社会的入院により国の医療費を使っていることが一番耐えられなかった。

② 退院が決まった経緯

退院に強い拒否をしていた父が他界をしたことをきっかけに、母が退院をしないかと勧めてくれた。しかし主治医の意見や母親の病状等が原因で、話が進まなかった。その後、主治医が変わり家族面談を設定してもらったが、兄や姉に退院を拒否されたため退院できずにいた。その後、病院の地域連携室の室長に、保証人を付けなくてもアパートに住める方法があると紹介され、退院が決まった。

③ 退院が決まってからの気持ち

とにかく辞書研究に没頭することができると思うと嬉しかった。入院中は、辞書研究に集中することができる生活をずっと望んでいたため、それが叶うかもしれないと思うと嬉しかった。しかし、なぜこんなにも入院をする必要があったのか、早く退院できたのではないかという後悔のような気持ちもあった。

④ 退院が決まってからの支援

退院後に入居するアパートに、4回ほど試験外泊をした。入院生活中も自分のことはすべて自分でやっていたので、特に苦勞したことはなかった。

2. 退院後から現在について

① 1日の生活について

時間	内容	場所	備考
8:00	起床	自宅	
9:00	・新聞を読む ・辞書研究 ・辞書の出版社に手紙を書く	自宅	
12:00	昼食	自宅	
14:30	・手紙を書くために必要な材料（便箋等）の買い出し ・書籍（主に辞書）の買い出し ・食材の買い出し ・手紙を郵便に出す	近所のお店	
18:00	夕食	自宅	
20:00	辞書研究	自宅	
23:00	就寝	自宅	

② 現在の生活で楽しいこと

辞書研究。研究には2つあり、1つ目は異なる辞書の中で掲載語自体や掲載語の解説の違いは何かを比較するという異なる辞書間での比較研究、2つ目は同じ辞書間で出版年代ごとにどのような違いがあるかという、同じ辞書間での年次での比較研究。この研究結果を辞書の出版社に報告する手紙を2日に1回書くということを、自分に課している。そのため、定期的な研究を通して手紙に書く内容を見つけないといけなことがとても大変。

60代になってしまったため、生きがいを見出すために自分にはライフワークを持つことが必要だと思った。この辞書研究でお金を貰えるかどうかはわからないが、何かしらで貢献したいと思っている。

③ 退院後、日常生活を送る上で苦労したこと

入院中に、退院後は本棚に囲まれた家に住むことを夢見ていた。寝室の他に書斎のような部屋を設けるために、家具のレイアウトを考えたりすることに苦労した。その時、スタッフが家具を組み立ててくれたりして助けになった。

④ 今後どのような生活をしたいか、今後の目標

今はほとんど1人で生活しているため、仲間が欲しい。所属している自助グループ（支援者曰く、現在自助グループはなくなったとのこと）で、文集を作成したことが楽しかった。近年公開された「舟を編む」という映画で、辞書に興味を持った人は多いと思う。これをきっかけに、もし本気で辞書に興味を持った人と知り合うことができれば、お薦めの辞書を差し上げたいと思っている。そのために同じ辞書を3冊購入した。自分のライフワークで他者に貢献したいということかもしれない。

3. 支援者からの話

① 入院中の本人の生活について

入院している時から、辞書研究や手紙を書くことに没頭していた。ただ、入院生活中はあまり多くの本を持ち込むことができなかったり、消灯時間が決まっていたりしたので、退院をして自身の没頭したいことに自由に取り組むことができている環境が手に入って良かったと思う。また、クラシック音楽が好きで、入院中はイヤホンで音楽を聞かなければいけなかったため、現在自宅で自由に聞くことができるようになったことも本人にとっては嬉しいことだと思う。

本人は仲間が欲しい等の希望があるかもしれないが、入院中に入院患者との交流はほとんどなかった。本人が難しい話をする等、関わりにくい部分があるため友達作りが難しい。

入院中から日常生活は自立していた。そのため、現在活用している訪問看護サービスの内容としても看護を提供するというよりは、主には見守り目的で訪問し、実際には会話をしたり、本人の要望に沿って家具を組み立てたりしている。

参考資料3 映像に関するアンケート

平成 31 年 2 月

PwC コンサルティング合同会社

映像に関するアンケート ご協力をお願い

平素は大変お世話になっております。

当社は厚生労働省補助事業「平成 30 年度 障害者総合福祉推進事業」におきまして、精神障害及び精神障害者に対する理解を促進し、精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に資する目的で映像を制作いたしました。

つきましては、本映像内容に対する評価、また今後の普及方法に関するアンケートにご協力いただけますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

回答いただく際には、下記の本映像概要をご参照いただけますと幸いです。

本映像概要

1. 映像制作目的

本映像は、長期入院患者数が 18 万人に上る（2014 年時点）という社会的背景を踏まえ、精神障害者の地域移行を進めるため、主に以下 2 つの目的を満たすものとして制作いたしました。

- (1) 障害等にあまり接点のない一般市民が、精神障害や精神障害者の地域での生活について知ること
- (2) 精神障害者の家族や関係者が、精神障害者が地域で生活するために必要なサービスや支援方法について知ること

2. 映像構成

本映像は、ダイジェスト編、導入編、本編（チャプター 5 つ）の 3 部構成となっており、各編の役割は

以下の通りとなります。

- ・ダイジェスト編：本編の視聴に興味を持っていただくための映像
- ・導入編：本映像を制作するに至る社会的背景を理解していただくための映像
- ・本編：精神障害者のありのままの生活を知っていただくための主映像

※ 回答いただいた内容は、個人が特定されないよう集計いたします。

※ また、集計結果は、本事業以外の目的で使用いたしません。

※ 調査票の内容などにご不明の点がある場合は、下記問合せ先までご連絡ください。

PwC コンサルティング合同会社 公共事業部：木本 留理子

視聴いただいた映像について、以下のアンケートにご回答ください。

問 1. あなたご自身のことについて、お聞かせください。(ひとつに○)

1. 精神障害をお持ちの方 2. 精神障害をお持ちの方のご家族 3. 1, 2以外の支援者
4. その他 _____

問 2. 本映像は、「障害等にあまり接点のない一般市民が、精神障害や精神障害者の地域での生活について知ること」を目的として制作しました。目的に沿う内容となっていると思いますか。(ひとつに○)

1. 思う 2. どちらかというと思う 3. あまり思わない 4. 思わない

問 3. (1)～(6)について、映像を通してどの程度理解できたか、お聞かせください。(ひとつに○)

問	よく理解できた	まあまあ理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった
(1) 長期入院を経験しても、地域での生活に向けた支援を受け、退院をすることができること	1	2	3	4
(2) 長期入院を経て、生きがいや楽しみを見つけ、個人なりの充実した生活を送っていること	1	2	3	4
(3) 地域での生活には、入院中には経験できないことがあるということ	1	2	3	4
(4) 精神障害(統合失調症)の症状や、当事者がその症状とどのように付き合っているかということ	1	2	3	4
(5) 精神障害者が地域で生活を送るため、生活の基盤作りや自立に向けた支援が必要であるということ	1	2	3	4
(6) 当事者同士の助け合い(ピアサポート)が、地域生活を支える重要な役割を担っているということ	1	2	3	4

問 4. 本映像を活用したい、又は誰かに視聴を薦めたいと思いますか。(ひとつに○)

1. 思う 2. どちらかというと思う 3. あまり思わない 4. 思わない

問 5. 本映像は、どのような方に視聴いただくと良いと思いますか。(当てはまるもの全てに○)

1. 精神障害をお持ちの方 2. 精神障害をお持ちの方のご家族 3. 1, 2以外の支援者
4. 福祉を学ぶ学生
5. その他 _____

問 6. 本映像は、どのような目的で活用されると効果的であると思いますか。(当てはまるもの全てに○)

1. 入院患者が、退院後の生活に対する不安を解消するため
2. 患者家族が、患者の退院後の生活に対する不安を解消するため
3. 支援者が、地域生活を送る当事者に対する支援方法や工夫を学ぶため
4. 福祉を学ぶ学生が、当事者との関わり方について学ぶため
5. 障害等に接点のない方々が、当事者に対する偏見を解消するため
6. その他 _____

問 7. 本映像の中で、今後視聴いただく方に、特に知っていただきたい内容は何ですか。

問 8. その他、本映像に対しご意見やご感想等がございましたら、是非お聞かせください。

ご協力いただき、どうもありがとうございました。

平成 30 年度障害者総合福祉推進事業

当事者・家族等による、精神障害者に対する理解促進等

に資する普及啓発方法の開発

事業報告書

発行日：平成 31 年 3 月

編集・発行：P w C コンサルティング合同会社